

至り待侘候鹽竈の櫻、松嶋の朧月、あさかのぬまのかつみふくころより北の國にめぐり、秋の初、冬までにはみのおはりへ出候、露命つゝがなく候はば又みえ候て立ながらにも立寄可申かなど、たのもしくおもひこめ候。南都の別一むかしのこゝちして、一夜の無常一夜のなみだもわすれがたう覺、猶觀念やまず、水上の淡きえん日までのいのちも心せはしく、去年のたひより魚類肴味口に拂捨一鉢境界乞食の身こそたうとけれとうたひに侘し貴僧の跡もなつかしく、猶ことしのたびはやつし〜てこもをかふるべき心がけにて御坐候、其上能道づれ、堅固の修行、道の風雅の乞食尋出し隣庵に朝夕かたり候而、此僧にさそはれことしもわらちにてとしをくらし可申と、うれしくたのもしく、あたゝかになるを待侘て居申候。宗無老御無事に御坐候哉、何角に付ておもひ被出候。尙々江戸御下被成下はば節句過には拙者は發足仕候間、それまでに候はば、懸御目度候。以上。

といふのがあつて、此句の元祿二年作たることを確證し得る。
 昨年仲秋の月を更科に見た、其記憶のまだ新たなる今年の元日は、かはこの田毎の月ならぬ初日かけこそ戀しけれ、と江戸の初日影から會遊の更科を追憶して、その二つが結びついたのである。

朝よ。さを誰まつしまぞ片こゝろ (桃 紙)
 朝よ。さを誰松島の片こゝろ (三冊子)
 朝さむも誰まつしまの片こゝろ (芭蕉句選)

支考の「古今抄」には

一とせ松崎の吟行に「あさよさを誰松島ぞ片心」かうは申し捨てたれど、かの浦山の姿情を盡さず其紀行にもらし侍りぬ。

といつて、「奥の細道」の旅中吟と見てゐるが、「奥の細道」松島の條には、ただ同行した曾良の句のみをあげて、「予は口を閉ぢて眠らんとしていねられず」と記してゐる。

支考の云ふ如く、満足せぬので紀行から省いたとも見られぬことはないが、又松嶋では句がなかつたも思はれる。それで自分は此句は、前句に引用した藤井氏所藏の書翰の内容などから推測して、奥羽の旅に心をそゝられつゝ、猶未だ旅には上らぬ前の作と見る。而して「句選年考」には元祿二年とし、晋風氏の「新編芭蕉一代集」には元祿元年説としてあるが、要するに元祿元年の冬か、二年の春

かの相異に過ぎないことになる。自分は前句引用の書翰から推して二年春の作であらうと思ふ。又此句には季語がないので「古今抄」には

名所に雑の發句とは、一句に其所の名を出だし、その風景の情をうつしゝが、又當季を結ばんとせば、姿情必ず穩なるまじ、

といひ、「三冊子」には

此句は季なし。師の詞にも、名所のみ雑の句にもありたし。季をとりあはせ、歌枕を用ゐ、十七文字にはいさゝか心ざし述がたしといへる事も侍る也、さの心にて此句もありけるか。

と云つてゐる。朝夜さ即ち明け暮れを、我がこの片ころに其所に遊ばんと戀ふるものは、誰がそこに待つてゐる松嶋ぞ、と松嶋に憧憬する意をのべたのである。

二見の圖を拜み侍りて

うたがうな潮の花も浦の春 (いつを昔)

「芭蕉翁眞蹟集」に「元祿二年仲春」とある。即ち松村桃鏡所有の二見の文臺に題したものである。「潮の花」とは旭光の激波に反映するのをいふ。文臺の二見の圖からその其地の風光を活用し來つて、二見の浦に寄する潮の花も今や浦の春の風情である、人々よ我等の俳諧の前途洋々たることを疑ふな、といふのである。

聖君 仁徳天皇。

高き屋にのぼりてみればの御製の有がたきを今も猶

叡慮にて賑ふ民の庭竈 (庭竈)

叡慮にて賑ふ民や庭竈 (芭蕉句選)

叡慮にて賑ふ春の庭かまど (一葉集)

越人が江戸滞在中に、歴史上の人物を題材として蕉門の作家たちから句を請ひ、後年此句に由つて「庭竈」と題する集を編んだ。越人は元年秋から芭蕉庵に假寓してゐたのだから、此句も元年作か二年作かは確定しがたいが、季題により先づ二年春の部に置く。

「高き屋」の御製とは云ふまでもなく「高き屋にのほりてみればけぶりたつ民のかまどはにきはひにけり」であるが、此歌は實は御製ではなく、藤原時平が仁徳天皇の御聖徳を頌し奉つた歌であるが、しかし一般には御製と信ぜられてゐるので、此場合はその一般的に見て置くべきものである。

「庭竈」は正月の季題で庭に竈を造り、或は焜爐などを持ち出して、そこで調理したものを竈神に供し家族も共に飲食する、畿内地方の風俗である。庭竈が春のものたることは明かであるから。春のは重複になる「民」が正しい。

第一は、今日は庭竈の日として各戸に炊煙がゆたかに見える、まことに民の富めるは朕の富めるなりと御仰せあつて、三年租税を御ゆるしになつた有がたき叙慮によつて、今猶民の庭竈がかくの如く賑ふと、聖徳の現代にまで及ぶことをたゞへ奉つたのである。又第二では、今日庭竈の日に叙慮によつてかくの如く賑ふ民やナア、と詠歎したことになる。

かげろふの我肩にたつ紙衣哉

(伊達衣)

陽炎の我肩に有紙子かな

(芭蕉句選)

「雪丸」には「元祿二年仲秋塔山旅店にて」と前書があつて、「水やわらかに走り行く音、曾良」「柚のやに獨活のあへものあつらへて、塔山」

其他に此筋、嵐蘭、北鯤、嵐竹の數名で歌仙が一巻ある。大垣の塔山が江戸に來た其旅店を訪ねての吟である。

陽炎の我肩に立のぼるのが見られる紙衣なるかな、と詠歎したのである。陽炎は普通自己から若干の距離あるところに見ゆるものであるが、塔山が旅館は春の日がほかほかとさしこむ一室で、そこで連中が閑談しつゝあつた時、芭蕉は自分の紙衣に陽炎のたつのを認めたのであらう。

此筋に望まれて茅舎の繪讚

むぐらさへ若葉は。やさし。破れ家
 後の旅
 葎さへ若葉やさし。や。破れ家
 一葉集

「後の旅」によると、奥羽北越の大旅行を終つて、美濃に入つてからの吟であるが、季語が春であるので便宜上春の部に繰り上げて置く。

此筋は大垣の宮崎荊口の子で、前句「陽炎」の歌仙にも入つてゐるから、此春は江戸に來たとみえる。

破家のほとりにある葎ですらも。さすがに春の若葉はやさしやナアと、詠歎したのである。

春雨や蓬をのばす草の道
 草の道
 (草の道)

「芭蕉句選拾遺」に元祿二年とするに従ふ。

草の道と云つても草がのびてゐるのではなく、いろいろの草が各嫩葉を見せ初めてゐる、其中にも蓬

は他の草よりも早く茂るものであるから、折柄しとしと降つてゐる春雨がやかく蓬をのばすナラんと想像したのである。

ただ春雨が蓬をのばすといふやうに解するものは、「や」を無視したものであることは屢のべたから略する。

はれ物にさはる柳のしなやかな
 有磯海
 はれ物に柳のさはるしなへかな
 小文庫

元祿八年の「有磯海」にある。「去來抄」に

去來曰、浪化集に「さはる柳」と出す、是予が謬り傳ふる也、重ねて史邦が小文庫に「柳のさはる」と改め出す。支考曰、「さはる柳」也、いかで改め侍るにや。去來曰、「さはる柳」とは奈何に。考曰、柳のしなへは腫物にさはると比喻也。去來曰、然らず、柳の直に觸りたる也、「さはる柳」といへば兩様に聞え侍る故、重ねて予が誤りを記す。考曰、吾子が説は行き過ぎたり、唯「さはる

柳」と聞くべし。丈草が曰、辭の續きは知らず、趣向は考が云へる如くならん。去來曰、流石の兩士も爰を聞き給はざるは口惜し、比喻にしては誰も云はん、直ぐさはるとはいかで及ばん、格位も亦格別也と論ず。許六曰、先師の短冊に「さはる柳」とあり、其上「柳のさはる」とは首切也。去來曰、首切の事予が聞く所に異なり、今論に及ばず、先師の文に「柳のさはる」と慥かにあり。許六曰、先師の後より直し給ふ句多し、眞蹟も證となしがたしと也、三子皆「さはる柳」の説也、後賢尙判じ給へ。

とあり、又

去來曰、如何なる故にやありけん、此句汝に渡し置く、必ず人に沙汰すべからずと、江府より書送り給ふ。其後大事の柳一本去來に渡し置けるとは、支考にも語り給ふ。其頃前猿蓑後猿蓑兩集とも除かれけるに、浪化集の半に先師遷化ありしかば、此句の空しく残らんことを恨みて、其集にはまゐらせけるなり。

とある。これによると、「猿蓑」選以前の江戸在住の時の作でなければならず、さうすると少くとも元祿二年の奥羽行脚發足前まで遡るべきものである、故に自分はこれを元祿二年に置く。

内容には寓意があるので。「大事の柳」と云ひ、またその寓意が露骨なので、「猿蓑」には入れなかつたものであらう。

譬喩——さはる柳のしなひ——支考、丈草、許六

實際——柳のさはるしなひ——去來、

と説が分れてゐるが、前掲の「去來抄」によつても、實際ではなく、譬喩なることが察せられる。譬喩なれば、「有磯海」の方がよく、即ち、世の中に處するには、宛かも腫物にさはる柳の如きしなひなるかな、と解すべきものである。かく解することは好ましくないが、すべての條件がさう解せざるを得ざらしむるのである。

山 家

鶴の巢に嵐の外（焦尾琴）のさくら哉
 鶴の巢にあらしの外（鵲尾冠）の櫻哉

「芭蕉翁發句集」に元祿二年とするに従ふ。鶴は學術的分類では鶴とは異つてゐるが、俗に「いふのつる」ともいふのでよく誤られる。そして俳書では文字まで鶴と鶴とは混同されることが屢ある。しかしたとへ山家でも、人里近くに巢を営むものは鶴の方であるが、芭蕉は一般的に鶴も亦鶴と同種と見てゐたかも知れない。

このあたりは山村のことゝて、樹の梢には鶴の巢があり、そこに嵐をよそにして咲き誇つて櫻かな、と詠歎したのである。

酒のみ居たる人の繪に

月花もなくして酒のむひとり哉

(曠野)

元祿二年の「曠野」にあるので其春の作と見る。

此繪はひとりで酒を酌んでゐるものであつたのだらう、それで、此畫中の人は、皎々たる月を仰ぐでもなく、また爛漫たる花を眺めるでもなく、ただ酒を飲むひとりなるかな、と詠歎したのである。

住る方は人に譲り杉風が別墅に移るに

草の戸も住み替る代ぞひなの家
草の戸も住かかはる世や雛の家
草の戸も住かゆる代ぞ雛の家
草の家も住替る世はひなの家

(奥の細道)

(笈日記)

(芭蕉翁發句集)

(一葉集所載風流宛書翰)

元祿二年三月廿七日曾良を伴うて長途の旅路に上つた、此道の紀を「奥の細道」といふ、此句はその第一句。

「奥の細道」の起筆は

月日は百代の過客にして。行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず、海濱にさすらひ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひてや

一年も暮、春立る霞の空に白川の關越えんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねぎにあひて、取もの手につかす、もゝ引の破をつづり、笠の緒付かへて、三里の灸すゆるより、松島の月先心にかゝり、住る方は人に譲り杉風が別墅に移るに「草の戸も住替る代を雛の家」面八句を庵の柱に懸置、云々。

とあり、「一葉集」の此句の前書は、何書に據つたものか、此文章とは異つて、はるけき旅の空おもひやるにもいさゝかも心にさはらんものむつかしければ、日頃住ける庵を相しれる人に譲りて出ぬ。此人なん妻を具し、むすめ孫など持る人なりければ。

とある。然るに「奥の細道菅菰抄」には

頃は二月末にて上巳の節に近き故に、雛を商ふ者翁の空き庵を借りて、賣物を入れ置所となしゝによりて此吟ありしといふ。

とある。芭蕉は二月末に庵を譲て杉風の別荘に移り、一日も早くと出發を急いだが、奥羽はまだ餘寒がきびしいと、杉風に引とめられて、いよいよ三月廿七日に首途したのは確かである、併し商品の雛を入れ置くところとしては「雛の家」は適當な用語ではない、故に「一葉集」の「娘孫など持る人」

に譲つたと見るのが穩かであらう。

今までは佗び人たる我が住つてゐた草庵も、これからは上巳の節句にも世人がする如くに雛を飾る家と、住みかはる代ぞ、と其あるじとの生活状態に懸隔のあるのに興味をもつたものである。

行 春 や 鳥 啼 魚 の 目 は 泪

(奥の細道)

「奥の細道」の第二句。同書には

彌生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から、不二の峰幽にみえて上野、谷中の花の梢又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりには、宵よりつどひて舟に乗て送る、千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまた離別の涙をそぐ。

として此句がある。

今や春は將に盡きんとする頃である、其時にあたつて我は長途の旅路に就き、人々は遠く千住までも送つてくれる。遙かに雲井に飛ぶ鳥即ち我は泣き、水郷に止まる魚即ち見送りの人々の目には涙がある、と別離綿々の情をのべたのである。

鮎の子のしら魚送る別哉

(續猿蓑)

元祿七年の「續猿蓑」にあるが「芭蕉翁發句集」に元祿二年とするに従てこゝに置く。

此句が二年なれば、何うしても江戸出發の際のものと見なければならぬ、然るに「伊達衣」には前書が

常陸下向に江戸を出る時送りの人に、

とあるので、千住から日光街道に向つた此行には適合しないやうにも思ふが、更に案ずるに等窮は、江戸から日光へ出るには常陸の地を過ぐるものと思つたのではなからうか。

送る人は門人である。故に夏といふ前途をもつ若鮎に擬し、自己は春の句も稍く過ぎんとする白魚に

擬したのである。

室の八島

糸遊に結つききたるけぶりかな

(雪まろけ)

「奥の細道」には

室の八島に詣す。同行會良が曰、此神は木の花さくや姫と申て富士一躰也。無戸室に入て焼玉ふちかひのみ中に、火々出見のみこと生れ玉ひしより室の八島と申、又煙を讀習し侍もこの謂也。將このしろといふ魚を禁ず。縁記の旨世に傳ふ事も侍し。

とばかりで此句はない、しかし後年出版した會良の遺稿「雪丸げ」にはある。

大神神社は下野下都賀郡壬生町總社にある、延喜式内社であるが今は郷社になつて居り、總社六所明神、又は室の明神として知られてゐる。此社の近くに池があつて、中に幾つかの島があるので八島といひ、其池から水蒸汽の騰るのが烟の如くであるといふことから「いかでかは思ひありとも知らすべ

きむろの八島のけふりならでは、實方「我がためにありけるものを下つけやむろの八島に絶えぬけふりは、成則」其他多く歌によまれてゐる、併し芭蕉の時代にただ傳説だけで、烟は立たなかつたであらう。

「絲遊」は地を離れて高きに立ち、「陽炎」は地に立つだけの差で、實質は同じものである。煦々たる春光に照らされて、絲遊がちらちらと立昇つてゐる、其絲遊に結びつきたるこゝ室の八島の名物の煙なるかな、と今はなき煙を現在に見た絲遊によつて連想し同化し、それを詠歎したのである。

入かゝる日も絲ゆうの名残かな

(雪丸げ)

これも前句と同じ時のものである。

前句では現在の絲遊から過去傳説の煙を連想したが、此句では現在の夕日に想を走せて、今や其形の消え去らんとする絲遊の如く、入りかゝる日もまた名残りなるかな、と西は落ちんとする日と影をひ

そめんとする糸遊との二つを連想しての詠歎である。

鐘つかぬ里は何をか春の暮

(雪丸げ)

これも亦同時の吟である。

入相の鐘もつかぬこの山間の僻村では、何をか便りにして、暮れなんとして暮れぬ春の夕を知ることであらうぞ、と「山中無_レ曆日、寒盡不_レ知_レ年」ともいふべき僻陬の閑寂さを云つたのである。

入逢の鐘もきこへず春のくれ

(雪丸げ)

これも亦同時の吟である。

春の日も將に西山に春かんとする今、それと伴ふ暮六つの鐘の響も聞えず、と殆ど前句と同じ境致を云つたのである。

あ。ら。た。う。と。青。葉。若。葉。の。日。の。光。
 た。ふ。と。さ。や。青。葉。若。葉。の。日。の。光。
 あ。ら。た。ふ。と。木。の。下。間。も。日。の。光。

(奥の細道)

(初 蟬)

(もよ草)

「奥の細道」の第三句。同書には

卯月朔日御山に詣拜す、往昔此御山を二荒山と書しを、空海大師開基の時日光と改玉ふ。千歳未來をさとり玉ふにや、今此御光一天にかがやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖隠なり。猶憚多くて筆をさし置ぬ。

として次に此句がある。

東照宮に詣で、此神の恩澤の天下の蒼生に及ぶのを、折柄の初夏の日の光りと、其光線を受けて艶やかさを見せてゐる若葉を假り來つて、あら尊しや、と讚仰詠歎したのである。

暫時は瀧に籠るや夏の始

(奥の細道)

「奥の細道」第四句。同書には

廿餘町を登つて瀧有、岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て、瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申傳え侍る也。

として此句がある。

陰曆四月十六日から七月十六日まで、佛家では一室に籠つて勤行する、それを夏籠、夏行、安居、または一夏ともいひ、其始めを「夏の始」と云つたのである。

この奥羽旅行は我々の一の勤行である、だから其手始として、暫くは裏見の瀧の裏の岩窟に籠るや、と詠歎したのである。

郭公うらみの瀧のうらおもて

(雪丸げ)

「奥の細道」にはないが「雪丸け」には前句と並んで出てる。
裏見の瀧の裏にも表にも時鳥が啼くや、と蹻蹻たる瀧音にも紛れぬ晝の時鳥の聲を詠歎したのである。

うら見せて涼しき瀧の心哉
(誹太郎)

「奥の細道」にはないが同時の吟であらう。

人間はとかく表面ばかり見せて、心の裏は見せないものであるが、これはそれと違つて、すつかり隠さず見せて、涼しい瀧の心なるかな、と詠歎したのである。道學的の構想で文學の領域からは距離があり過ぎる、芭蕉が紀行中に録さぬのは尤もである。

陸奥にくだらむとして下野國まで旅立けるに、那須の黒

羽と云所に、翠桃何某の住けるを尋て深き野を分入る程

道もまがふばかり草ふかければ

秣負ふ人を枝折の夏野哉
(陸奥千鳥)

「奥の細道」には此句はないが、同書の

黒羽の館代、淨坊寺何がしの方に音信る、思ひがけぬあるじの悦び、日夜語つづけて其弟桃翠など朝夕勤とぶらひ、自の家にも伴ひて親屬の方々にもまねかれを日ふるまゝに、一日郊外に云々。

とある條に相當する。「雪丸げ」には前書が「奈須余瀬翠桃亭を尋て」とある。「奥の細道」の桃翠とあるが正しく「陸奥千鳥」「雪丸け」の「翠桃」は誤記である、黒羽は大關家の陣屋のある所で、館代は即ち城に於ける城代といふ如く上席の家老で、淨坊寺が正しい。樋口功氏によれば、此人は圖書と稱し、號を桃雪と云つたらしいとのことである。弟桃翠は(樋口氏によれば)鹿子畑善太夫と云つた。余瀬は黒羽と川を挟んで西方一里許のところにある、桃翠はそこに住んでゐたとみえる。

「陸奥千鳥」此句に「青きいちごをこぼす椎の葉、翠桃」「村雨に市の假屋を吹とりて、曾良」翅輪

桃里、の五人で此行最初の歌仙がある、然るに「雪丸け」には、第三までは同じで、以下多少の相違があり、連衆も二寸、秋鴉の二名を加へてゐる。

夏草の茂つた那須の廣野は、何れをさして行くべきかに迷ふ、ただ折ふし行き逢ふ秣など負つた里人を枝折ともしつつ行く夏野なるかな、と詠歎したのである。

那須温泉

湯をむすぶ誓も同じ岩清水

(陸奥千鳥)

「奥の細道」には句はないが、前段のつづきに

ひとひ郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて玉藻前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣。與市扇の的を射し時、別しては我國氏神正八幡とちかひしも、此神社にて侍ると聞ば、感應殊しきりに覚えらる。暮れば桃翠宅に歸る。

とある段に相當する。「雪丸げ」には前書が

温泉大明神の拜殿には八幡宮を移し率りて、兩神一方に拜れ給ふ。

とある。温泉神社は下野那須郡那須村湯本にあり、下野十一社の一で、祭神は大己貴命、少名彦命で相殿に八幡宮を祀つてある、故に或は温泉大明神とも、或は八幡宮といふも、實は同一の社なのである。京都の男山神社を或は岩清水八幡と呼び、略してただ「岩清水」とのみでも八幡宮の代名詞にするこがある。

此句の「岩清水」は季語であると同時に八幡宮をも兼ね意味してゐる。

岩清水をむすぶ即ち八幡宮を拜むのも、湯をむすぶ即ち温泉明神を拜むのも、其兩神がこゝでは相殿に祀られてゐるので、靈驗は同じことである、といふのである。

秋鴉主人の佳景に對す

山も庭もうごき入るゝや夏坐敷

(雪丸げ)

「秋鴉」は何人か知らぬが「秣負ふ」の歌仙の末に「珍らしき行脚を花に留置いて」と一句ある、句

もあまりうまくないのに、花の坐に据ゑられてゐるのは、相當の地位にあつたからだらう、それはいづれにしても余瀨滯在中の吟である。

折から一吹きさつと吹き渡る風が、涼味と共に、對山の松杉も、庭前の樹木も、動かし入るゝやナア、と佳趣を詠歎したのであるが、「動かし入るゝ」「動き入る」何れかでなければ自他が混亂する、故に此句は紀行中には收めなかつたのであらう。

修驗光明寺と云有、そこにまねかれて行者堂を拜す

夏山に足駄を拜む首途哉

(奥の細道)

「奥の細道」の第五句

「修驗」は即ち役の小角を祖とする山伏の宗派で、小角は常に高足駄を履いて高山峻峰を跋涉したと云はれてゐる。「光明寺」は或書に「田村」とあるが其地名に心あたりがなく、樋口功氏は「芳賀郡山本村にありといふ」と記してゐる、それなれば黒羽より十四五里、黒羽方面と正反對に常陸近くに

ある「句選年考」頭註に

光明寺は下野黒羽の領主大關伊豫守家臣、祿四百石、津田光明寺云、武家修驗なり、今の光明寺は津田家より分れて一字となる。本家は祿百五十石津田源太左衛門といふとある。

いづれ光明寺で役の小角の像を拜したのであらう。今我々もこれから山川何百里の長途の旅の始めにあるので、道程の恙なからんことを祈る爲めに、この夏山の中の行者堂に、往昔天下の山川を跋涉されたといふ、尊像を拜む首途なるかな、と役行者を崇敬し且つは自己たちの爲めにも祈つたのである。

木啄も庵はやぶらす夏木立

(奥の細道)

「奥の細道」の第六句。同書には

當國雲岸寺のおくに佛頂和尚山居の跡あり。一豎横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかり

せば」と松の炭して岩に書付侍りといつぞや聞え玉ふ。其跡みんと雲岸寺に杖を曳ば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人おほく道のほど打さはぎて、おぼえず彼麓に至る。山はおくあるけしきにて、谷道遙に松杉黒く苔したたりて、卯月の天今猶寒し、十景盡る所、橋をわたつて山門に入。さてかの跡はいづくのほどにやと、後の山によちのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲居士の石室をみるが如し。

として此句がある。

「雲岸寺」は「雲岩寺」の誤記で、那須郡賀川村にある。臨濟禪の巨刹で、開基は大治年中の叟元和尙、佛國禪師弘安年中に之を再興し、後ち佛應禪師之に住し、この三師を此寺の三開山と云ふ。「佛頂」と號する禪僧は數人あるが、この佛頂は文章中の「いつぞや聞え玉ふ」とあるから推しても、鹿嶋根本寺の佛頂が、隱退後に此所に幽棲したのである。

佛頂禪師から消炭で歌を書きつけたことを聞いてゐたので、其跡を訪ねて來て見れば、夏木立の蔭に岩窟に結びかけて一小庵があつた。さすが尊き聖の住み給ひしところとて、啄鳥木もこの庵は破らざらざらありし日の形が存してゐる、といふのである。

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

(奥の細道)

「奥の細道」の第七句。同書には

是より殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ短冊得させよと乞。やさしき事を望侍るものかなと。

して此句がある。雲岩寺から殺生石に向つたのであるが、不思議に思はれることは、淨法寺家滞在中に一度那須の湯本へ行つてゐるのに、何故に其時殺生石を尋ねずに、更に今度そこに向つたのであらうか、とにかく紀行の文章のつゞきから考察して、湯本へは二度行つたことは否定出来ない。

淨法寺家から馬で送つてくれた、其馬方が「江戸の先生私に短冊を一枚書いて下せえ」といふ、いやこれは見かけによらぬやさしき心がけのものかな、汝のさういふ詞は宛かも思ひもかけずに時鳥の音を聞くやうなものである、いざ馬を横に牽き向けよ、下りて書いてやらう、といふので、馬夫の殊勝な望みを時鳥の聲に譬喩したのである。「師走袋」に

馬引き向けよと軍出立の事々しく言ひ立てたるは、三浦義明が狐を駈りし故事を含めて、所がら應しく詠めるなり。

と云へる如きは、全然文中の「優しき事を望み侍るものかな」とある語勢を忘れた解釋である。

高久、角左衛門に宿る。みちのく一見の桑門同行二人、那

須の篠原を尋て、猶殺生石を見んとこへける程に、雨降り

ければ先このところに留て。

落くるやたかくの宿のほとゝぎす

(雪丸げ)

「高久」は「たかく」と讀む。黒羽、雲岩寺方面から湯本に行く通路のほと中央にあたる。「角左衛門」は號を青楓と云つた。雲岩寺から馬で殺生石に向つたが、雨にふられたので高久の青楓を訪うてそこに泊つたのである。「桑門同行二人」は芭蕉と曾良。此句には曾良の「木の間をのぞく短夜の雨」と脇だけある。「子規」は現實の鳥ではなく自分たち二人の譬喩で、地名の「高久」から連想して

落となり、其「落」は江戸落、奥州下向などいふ意をふくみ、連想と懸調とで構成されてゐる。われ／＼二人は、この高久の宿の子規として、江戸からはる／＼と落ち來るや、と輕きユーモアを含んでの詠歎である。

殺生石

石の香や夏草赤く露暑し

(陸奥千鳥)

「奥の細道」には此句はなく

殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒氣いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。

とのみある。「殺生石」は那須湯本にあつて、玉藻前即ち金毛九尾の狐が那須野に遁れ、三浦介義明に射殺され、化して石となりて毒を吐き、生物のこれに觸るゝものは忽ちにして死す、後に源翁和尚が杖を以て之を打ち回向したので、石は碎け靈は即ち成佛したといふ傳説をもつてゐる、石は砒素を

ふくんでゐるのであらう。
殺生石のほとりに来て見れば、一種の臭氣があり、附近の夏草も一般の綠色ではなく、緒く見え、そこに置く露も涼しげな氣分をもたらさず、反て暑くるしく思はれる、といふのである。

田 一 枚 植 て 立 去 る 柳 か な
(奥の細道)

「奥の細道」の第八句。同書に

清水ながるゝの柳は蘆野の里にありて田の畔に残る。此所の郡守戸部某の此柳みせばやなど、折々に玉ひ聞え玉ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此柳のかけにこそ立より侍つれ。
として此句がある。「蘆野」は那須郡で、奥の白河に入る街道である。白河街道は二つあつて、一は温本から引かへして高久からするのが順路であるのに、殊さらにその道を横断して迂路をとつたのはこの柳を見る爲めであつたらう。その柳といふのは「山家集」の「道のべの清水ながるゝ柳かけしばしとてこそ立ちとまりつれ、西行」とよんだ所として傳へられてゐる、無論この歌はこゝでよんだ

ものではないが、芭蕉の西行心酔は、西行といふ名を負つたものは何でもうれしくてたまらなかつたらしい。

往昔西上人もこの樹蔭にしばしとてこそ立ち休らはれた、今又自分も羈旅の途すがら此柳の蔭にこそたちより侍りつれ、そして懐古の情に思はず時を過ぎした、其間に、あたりの百姓は田を一枚植ゑてしまつた。西行もやがて立ち去つたであらう如く、我もまた立ち去る柳かな、と詠歎したのである。

しら河の關をこゆるとて、ふるみちをたどるまゝに

西 か 東 か 先 早 苗 に も 風 の 音
(信夫摺)

白河の關の舊趾は現今の白河から一里餘の右方にあつて、今に古關村の名を存してゐる、下野の蘆野から舊街道を辿つたのである。「一葉集」には前書が「奥州今のしら川に出三句」として、次の句と共にあけてゐるが、殊更に「今の白河」といはなくもよい。「奥の細道」には句がなくて

心許なき日數重るまゝに、白川の關にかかりて旅心定りぬ。いかで都へと便求しも斷也。中にも此關は三關の一にして、風騒の人心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ。

とある。
白河の古道をたどり行けば、どちらが西か、どちらが東か、方角すらわからない、昔の「都をばかすみ」とも立ちしかど秋風ぞふくしら河の關 能因法師「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白河の關、頼政」を憶ひ起して、其秋風を耳に残し、其紅葉を俤にして過ぐれば、今は秋ならぬに、先づ早苗にも風の音がする、といふのである。

早苗にもわがいろ黒き日數哉

(泊船集)

此句も「奥の細道」にはないが、「雪丸げ」には前句と並んである。

能因法師は前掲の「秋風」の歌を作つたが、それを真しやかにする爲めに、奥州に旅をしたと偽つて、都に在りながら窓から、顔を出して日焼かせしめたといふことが云ひ傳へられてゐる。
今秋ならぬ早苗の頃にも、我々は能因法師の如くことさら街ふまでもなく、色が黒くなつた旅寐の日數なるかな、とはるく古人のことくしく思つてゐた奥州路に、現在足を入れたことを詠歎したのである。

風流のはじめや奥の田植歌

(奥の細道)

「奥の細道」の第九句。同書には
とかくして越行まゝに、あぶくま川を渡る。左に會津根高く、右に岩城、相馬、三春の庄、常陸、下野の地をさかひて山つらなる。かけ沼と云所を行に、今日は空曇て物影うつらず。すか川の驛に等窮といふものを尋て、四五日とゞめらる。先白河の關いかにこえつるやと問。長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷て、はかしくしう思ひめぐらさず。

として此句があり、「信夫摺」には少しく異つて、

みちのくの名所く心におもひこめて、先關屋の跡なつかしきまゝに、ふるみちにかゝりていまの
白河も越えぬ頓ていはせの郡にいたりて、乍單齋等窮子の芳扉を扣、彼陽關を出て故人に逢なるべ
し。

とあるのは等窮の家に書残したものであらう。等窮は須賀川の名主で、相良伊右衛門と云つた。

「信夫摺」「雪丸」に「覆盆子を折て我まうけ草、等窮」「水せきて晝寐の石や直すらん、曾良」三
吟の歌仙がある。

先づ此句で考へねばならぬのは「風流」とは何かといふことである。一には「風流」を風雅、みやび
と解し得るし、また一には諷ひ物に對する古き名稱なる「風流」とも解し得る、而して自分は後説を
採る。

白河を過ぎ須賀川に等窮を訪ねたら、主じが、白河の關はどんな氣分でお越しですか、ときいたの
で、それに答へて、このみちのくの境に入つてみると、あちらこちらに田植歌が聞こえ、それがいか
にも鄙びた中に純眞な古調を帯んでゐるので、この奥州の田植歌が我國の諷ひ物即ち風流の始めやナ

アと、感じ入りました、と其郷の古樸さを賞揚して答へたのである。

白川に住、何云へ文をつかはすはしに

關守の宿を水雞にと。は。う。も。の。

(伊達衣)

關守の宿を水雞にと。う。も。の。を。

(雪丸け)

等窮の許に滞在中に何云へ手紙をやつた、其はしに書つけたのだが、何云と前から交際があつたのな
ら白河を通過する折訪ねるはずである、そのなかつたのは白河に何云あることを知らなかつた證で
ある、等窮から何云の事を聞き、其場所がらから「關守」ととなへて敬意を表したので、即ち俳諧の
關所守の意である。

白川通過の折に、俳諧の關守たる足下の宿を、水雞に尋ね聞いてなりと御訪ねすべきであつたが、遂
訪ねることもせず關所を過したことは残念であつた、といふのである。

栗といふ文字は西の木と書て、西方浄土に便ありと、行
基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用玉ふとかや。

世。の。人。の。見。付。ぬ。花。や。軒。の。栗
隠。れ。家。や。目。に。た。ぬ。花。を。軒。の。栗
(奥細の道)
(雪丸け)

「奥の細道」の第十句。同書には尙この前に

此宿の傍に大きな栗の木蔭をたのみて世をいとふ僧有。椽ひらふ太山もかくやと覺られて、もの
に書侍る其詞。

として、前の文と句がある。「伊達衣」には

桑門可仲は栗の木のもとに庵をむすべり。傳へ聞行基菩薩の古は、西に縁有木なりと、杖にも柱に
も川ひ給ひけるとかや。幽栖心ある分野にて、彌陀の誓ひもいとたのもし。

とあつて、「稀に螢のとまる露草、栗齋」「切崩す山の井の名は有ふれて、等窮」以下、曾良、須竿
素蘭、等雲、の歌仙が一卷ある。

行基菩薩の事蹟を思ひ寄せて、栗の下に庵を結んでゐる僧をなつかしみ、軒の栗は、世人の見つけぬ
花やナア、と其世を遁れて住み終せるさまを詠歎したのである。後句の方は初作であらうが、先づ共
庵を隠家やと提擧し、軒の栗は目たぬ花を咲かす、といふのである。無論改作の方がよい。

須賀川の驛より二里ばかりに石河の瀧といふ有よし、行

てみん事を思ひ催し侍れど、このごろの雨にみかさはり
て河を渡る事かなはずと、いひてやみければ。

五月 雨 は 瀧 降 う づ む み か さ 哉
(信夫摺)

「石川の瀧」は石川郡泉村大字龍崎にあつて、乙字瀧、龍崎瀧とも呼ばれ、阿武隈川の奔流がこゝで
急に落下して此瀧となり、屈曲して乙字形を爲す。

「一葉集」には前書が「阿武隈川の水源にて」とあつて、其地に臨んだやうに見えるが、それは書方
がわるいのである。

瀧を見に行きたいと思つたが、生憎の雨で行かれない。即ちこの五月雨は、折角見に行きたい瀧を降り埋める水嵩なるかな。と雨を怨んでの詠歎である。

「埋む」は正しくは「埋むる」で、「埋む」は破格である。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺 (奥の細道)

早苗つかむ手もとや昔しのぶ摺 (卯辰集)

「奥の細道」の第十一句。同書には

あくればしのぶの石を尋て忍のさに行。遙山陰の小里に、石半土に埋めてあり。里の童部の來りて教ける。昔は此山の上に侍しを、往來の人の麥草をあらして、此石を試侍をにくみて、此谷に落せば、石の面下さまにふしたりと云、さもあるべき事にや。

として此句がある。後に獨立の文章として屢書改めたものらしく、「卯辰集」には

しのぶもちずりの石は、みちのくふくしまの驛にありて、往來の人の麥くさを取て、このいしをこ

ろろみけるを、里びとちも心うく思ひて、此谷にまろばし落しぬ。石の面はしたさまにふしたれば、今はさるわざする事もなく、風雅の昔にかはれるをなげきて。

として「早苗つかむ」の句があり、「花の雲」には

もぢ摺石はふくしまの驛東一里斗に、山口と云所に有。里人のいひ傳へ侍るは、往來の人の此石試むと、麥草をあらし侍るをにくみて、此谷に落し入侍るよし。今はちがやのなかに埋れて、石の面は下さまになり侍るとかや。誠に風流のむかしにおとり侍るぞ、いと本意なくおほえ侍る。

として「早苗つかむ」の句があり、「小文庫」には

忍ぶの郡しのぶの里とかや、文字ずりの名残とて方二間ばかりなる石あり。此石はむかし女のおもひに石になりて、其面に文字ありとかや。山藍摺みだるゝ故に、戀によせておほくよめり。いまは谷合に埋れて、石の面は下さまになりたれば、させる風情もみえずはべれども、さすがにむかしおほへてなつかしければ。

として「早苗とる」の句がある。

「文字摺石」は福島縣信夫郡岡山村大字山口にある、芭蕉の頃は地に埋れてゐたのを、明治になつて

から掘り出して、今は同所の観音寺の境内にある、「文字摺」は交錯して亂れ摺りにするの意で、「もぢ摺」と書くのが正しい、「信夫摺」とは往昔信夫郡から貢したからとも、又「葱」で摺るからとも云はれ、それに就ては異説考證も種々あるが省略する。とにかく古來「みちのくのしのぶ文字摺たれゆへにみだれそめにし我ならくに、融」「思へどもいはでしのぶのすり衣ころの内はみだれぬるかな、頼政」「みちのくのしのぶもじすり忍びつゝ色にはいでじみだれもぞする、寂然」等すべて戀の歌によまれて名高い。

文字摺石を尋ね来て見ると、頃しも田植盛りで、早乙女が苗を採つてゐる。あの早苗をとる手もとはや昔かの文字摺石にて文字すりをせしならん、其里ひた早乙女の風情から、文字摺をした頃の人かと詩的に假想したのである。

五月乙女にしかた望まんしのぶ摺

(雪まろげ)

或は前の句の原作ではないかと思ふ。

「しかた望まん」と云つたあたりにわざとらしさがあつて、前句に較べて見劣りがする。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

(奥の細道)

「奥の細道」の第十二句。同書には

月の輪のわたしを越て瀬の上といふ宿に出。佐藤庄司が舊蹟は左の山際一里半斗に有。飯塚の里野と聞て尋く行に、丸山といふに尋あたる、是庄司が舊館也。麓に大手の跡など、人の教ゆるにまかせて涙を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す、中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひかひしき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。墜涙の石碑も遠きにあらず。寺に入て茶を乞へば、爰に義經の太刀、辨慶が笈をどめて什物とす。

として此句がある。佐藤庄司元治は繼信、忠信の父で、二子共に義經の爲に忠死し、後頼朝の泰衡を征する時、鎌倉勢を支へて一族皆戦死した。又繼信、忠信の死せる後、其嫁二人は戎装して夫の姿に擬し、舅姑を慰めたといふ傳説がある。其舊蹟は信夫郡飯塚(今の飯坂)に近く、平野村大字佐波野

にあつて、大鳥城と云ひ、里人は丸山城とも又はたゞ佐藤の館ともよぶ。又同村大字伊佐野の醫王寺に佐藤一族の墓があり、そこに義經、辨慶、其他の人々の遺物を蔵してゐる。

五月朔日に佐藤庄司の舊跡を弔ひ、醫王寺に人々の遺物を見ての吟で、今あたりの民家には紙幟を立てゝあるが、それと共にこの笈も太刀も端午の日に飾れ、そして世人をして、當時の忠臣たちの功をしのばしめよ、といふのである。

笠嶋は。いづこさ月のぬかり道

(奥の細道)

笠嶋や。いづこさ月のぬかり道

(猿 糞)

「奥の細道」の第十三句。同書には

笠嶋、白石の城を過、笠嶋の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんと人にとへば、是より遙か右に見ゆる山際の里をみのわ、笠嶋と云、道祖神の社、かたみの薄、今にありと教ゆ、此比の五月雨に道いとあしく身のつかれたれば、よそながら眺やりて過るに糞輪、笠嶋も五月雨の折にふれたり

として此句があり、「猿糞」には

奥州名取の郡に入て、中將實方の塚はいつくにやと尋侍れば、道より一里半ばかり左の方、笠嶋といふ處に有とをしゆ、ふりつゞきたる五月雨、いとわりなく打過るに。

とある。藤原實方は宮中で行成と口論して、行成の冠を打落したため、勅勘を蒙り、歌枕見て参れとて陸奥守に左遷され、笠嶋社前を馬より下らざ乗打したので、神の咎めで落馬して歿した、と云ひ傳へられてゐる。笠嶋は宮城縣名取愛嶋村大字笠嶋で、同村大字鹽手に其墓があり、其附近には實方にゆかりの地名が残つてゐる、「かたみの薄」とは「山家集」の「くちもせぬ其名ばかりはとゞめ置きて枯野のすゝきかたみとぞ見る、西行」とある如く、實方のかたみの芒と云ひ傳へられるものがある。つたのである。

茲に怪しむべきは、前掲文章中に圈點を附したる如く、一には「笠嶋郡」とあり一には「名取郡」とあること、一には「是より遙か右に見ゆる山際の里」とあるに、一には「道より一里半ばかり左の方」とある事である。「笠嶋」といふ郡名はないから、これは「庄」を「郡」と誤つたものと見て解決されるとしても、「右」と「左」は何とも判断に迷ふ。此句の後に「岩沼に宿る」とあるから、此句は白石を出て

岩沼に到る途中であらねばならぬ、然るに實方の古蹟笠嶋は、白石と岩沼の間ではなくて、岩沼から仙臺に行く道の左方で、即ちこの次の日の旅程にあたる、それで「猿籠」によれば、二日に飯坂を立ち、白石を経て、病を堪へつゝ、約十里の道を、一度岩沼を通過して笠嶋を左方に眺め、更に引返して岩沼に泊つたといふ矛盾を生ずる。「奥の細道」によれば、白石を出て右方に笠嶋を見やり、其夜岩沼に泊つたことになつて極めて自然である。ところが白石を出て間もなく、遙か右に見ゆる山陰に「笠嶋」といふ部落が別にある。それで私に案ずるに、芭蕉が白石を出ると直ぐ笠嶋の所在を尋ねると、其土地人が無關心に、笠嶋は街道の右の方の遙かの山陰だと教へ、紀行はそれに由つて綴り、後日眞の笠嶋は街道の左方一里計なることを知つて、「猿籠」には改めて出したのではなからうか、極めて怪しい推測ではあるが、さうでなければ「左」と「右」との相違を解決し得ないのである、この五月のぬかり道に、笠嶋はやいづこなるらん、と立寄らで過ぐる舊蹟を偲んだのである、

櫻より松は二木を三月越 (奥の細道)

櫻より松は二本を三月越 (鳥の道)

櫻より松の二木を三月越 (芭蕉句選)

「奥の細道」の第十四句。同書には

武隈の松にこそ目覺る心地はすれ、根は土際より二木にわかれて昔の姿うしなはずとしらる。先能因法師思ひ出。往昔むつのかみにて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此たび跡もなしと詠たり。代々あるは伐、あるは植繼などせしと聞に、今將千歳のかたちとこのひて、めでたき松のけしきになん侍し。「武隈の松見せ申せ遅櫻」と擧白と云ものゝ餞別したりければ、

として此句がある。

「武隈」は岩沼の古名で、その武隈神社(又は武駒)のほとりに、古歌に名高い武隈の二木の松がある。「後拾遺集」に「陸奥より上りける時」として「たけくまの松は二木をみやこ人いか」と問はゞみきとこたへん、橘季通」といふ歌がある。必ずしもこれによつたといふではないが、「待」と「松」、「見」と「三日月」の縁語になつてゐるのは異曲同工である。

此行の首途に、門人草壁舉白が饑別によんだ句を憶つて、其遅櫻よりも期待したのは、武隈の松は二木なりと豫て聞いて、その二木を出發以來三月越し念頭に置いたことであつた、といふのである。

田[。]や[。]麥[。]や[。]中[。]にも[。]夏[。]の[。]ほ[。]と[。]ゝ[。]ぎ[。]す[。] (雪丸け)

麥[。]や[。]田[。]や[。]中[。]にも[。]夏[。]は[。]ほ[。]と[。]ゝ[。]ぎ[。]す[。] (もよ草)

田[。]や[。]麥[。]や[。]中[。]にも[。]市[。]の[。]ほ[。]と[。]ゝ[。]ぎ[。]す[。] (芭蕉翁發句集)

「雪丸けに」は那須にての吟三句と共にあるので、此句も同所での作の如くに見られる、然るに「一葉集」には前書が「仙臺にて」とある。又夏の季たることの明かな時鳥に、特に「夏の」と置くのは何の意義もなさない。思ふにこれは、「市」の字の草體を「夏」と誤つて寫したか、或は彫り崩したものであらう、そして「市」といふ語は黒羽あたりにふさはしくないから、「仙臺」と見る方がよいと思ふ。何れが是、何れが非の確證を得るまで、自分は假に「市」と「仙臺」を採つて置くことにする。

旅寐の日數がつもれば、或は早苗田の上に、或は麥畑の空に、時鳥の鳴く音を聞いたのは屢であつたが、中にも今この仙臺に入つて聞く市中の時鳥の音は、また更に一層の風趣を感じしめる、といふのである。

あ[。]や[。]め[。]草[。]足[。]に[。]結[。]ん[。]草[。]鞋[。]の[。]緒[。] (奥の細道)

あ[。]や[。]め[。]草[。]紐[。]に[。]む[。]す[。]ば[。]ん[。]草[。]鞋[。]の[。]緒[。] (泊船集)

「奥の細道」の第十五句。同書には

名取川を渡りて仙臺に入、あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右衛門と云ものあり、聊心ある者と聞て知る人になる。このもの年比さだかならぬ名どころを考置たればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらる。玉田、よこ野、づゝじが岡はあせび咲ころ也。日影ももらぬ松の林に入て、爰を木の下といふとぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひかみかさはよみたれ、藥師堂、天神の御社など拜て其日はくれぬ。猶、松崎、鹽竈の所々畫

に書て送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの爰に至りて其實を顯す。

として此句がある。「みさぶらひみかさ」とは「古今集」の陸奥歌「みさぶらひみ笠と申せみやぎ野の木の下露は雨にまされり」とあるのをいふ。それを固有名詞にして名づけた場所に案内したのである。蝮は紺の香を嫌ふといふので、旅馴れた人は夏日は紺の緒の草鞋を用ひたのである。其紺緒の草鞋を贈つたので、この加右衛門のなか／＼旅に馴れたしたゝか者なることを知つたので、「しれ者」は「痴者」の方ではなく、「なかなか者」の意である。

時は端午であり、菖蒲には愛すべき香氣があるので、これを加右衛門の厚意に擬し、その厚意の贈物なる草鞋の緒を、今ありがたく足に結ばん、と謝意をのべたのである。

松 嶋

しま／＼や千々に碎きて夏の海

(芭蕉句選拾遺)

「一葉集」にも、晋風氏の「新編芭蕉一代集」にも考證を要するものとしてある。

「奥の細道」には(五月十日)

抑ことふりたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡洞庭、西湖を耻ず。東南より流を入れて江の中三里浙江の潮をたゞふ。嶋々の數を盡して欲ものは天を指、ふすものは波に匍匐、あるは二重にかさなり三重に疊みて、左にわかれ右につらなる。負るあり、抱るあり、兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈曲をのづからためたるがごとし。其氣色冒然として美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし、大山すみのなせるわざにや、造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡さむ。雄嶋が磯は地つゞきて海に出たる嶋也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有。將松の木陰に世をいとふ人も稀々々見え侍りて、落穂、松笠など打けぶりたる草の庵閑に住なし、いかなる人とはしらずながら、先なつかしく立寄ほどに、月、海にうつりて晝のながめ又あらたむ、江上に歸りて宿をもとむれば、窓をひらき二階を作て、風雲の中に旅寐すること、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。「松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす、曾良」予は口をとちて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂、松嶋の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解

てこよひの友とす。且杉風、濁子が發句あり。
とあつて此句はない。全く更に考證を要するものである。
嶋々をや千々にくだきて、かゝる夏の海とはなれるものならん、といふのである。

夏草や兵どもが夢の跡
夏草や兵ども夢の跡
(奥の細道)
(泊船集)

「奥の細道」第十六句。同書に(五月十四日)

三代の榮耀一睡にして、大門の蹟は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金雞山のみ形を存す。先、高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入。康衡等が舊跡は衣が關を隔て、南部口をさし堅め夷をふせぐと見えたり。偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

として此句がある。又「白馬集」には

さてもそののち御さうしは、十五と申すはるの比、鞍馬の寺を忍び出、あづまくだりの旅衣、はるけき四國西國も、此高館の土となりて、申すばかりは泪なりけり。
として此句がある。

平泉は岩手縣磐井郡にある。藤原清衡、基衡、秀衡三代茲に居り奥羽を睥睨してゐたが、文治中義經の來りて秀衡に投ずるにあたり、新に衣川の館を築いてそこに置いたが、秀衡歿して後、泰衡父の遺言を守らずして、衣川の館を襲ひ、義經は自盡し、泰衡は反て鎌倉勢に滅ぼされてしまった。藤原氏一門、或は義經の家臣たちの宅趾は此附近諸所に散在してゐる。

芭蕉の此句碑は毛越寺にあるが、磨滅殆ど文字を辨ずることが出来ぬ様になつたので、其側に新に碑を建てたが、書も刻も極めて拙劣で見ると堪へぬほどある。

此句は文法上些の矛盾なしに二様に解し得る。(一)は、今平泉に來つて、藤氏三代榮花の跡、または義經主従最期の跡などを弔ふに、杜甫が長安の荒廢を詠める詩に、國破山河在、城春草木深と云つた如く、草が徒らに茂つてゐるのみで、ありし世の盛んなりし風情は何所にもない。それでこれらの

夏草はや、昔主の爲めに命を鴻毛より軽しとして、奮戦して屍を原野に曝したるかの兵どもの夢の跡ナラン、と夏草から古を追憶し想像したものとする（二）は同じ事ながら、其當時の兵どもの夢の跡なるこの夏草や、と古への追憶から現在の茂れる草を詠歎したものとする。この二のうち何れを採るかは人々の自由であるが、自分は其第一解に従ふものである。

五月雨の降のこしてや光堂

(奥の細道)

「奥の細道」の第十七句。前段の平泉の條について、

かねて耳驚したる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廢空虚の叢と成べきを、四面新に圍て、蔓を覆て風雨を凌、暫時千歳の紀念とはなれり。

經堂、金色堂は共に平泉の中尊寺に現存し、此句の碑も其ほとりにある。金色堂は當時黄金花さくと云はれた陸奥の金を塗つたので光り堂の名があり、今其螺鈿の柱一本造るにも何萬の資を要するとか

聞いてゐる、如何に其倣奢なりしかが推測されよう。

往古此寺は七堂伽藍蔓をつらねてゐたといふ、然るに今は其が佛なく、ただ僅にこの光堂が残つゐるのみである。それは幾世もの五月雨が降り濺いでも、其光りを消し盡さずに残してやかくあるらんと想像したのである。

蚤風馬の尿。こぐ。枕もと (今日の昔)

蚤風馬の尿。す。る。枕もと (奥の細道)

蚤風馬のばり。こぐ。枕もと (泊船集)

「奥の細道」の第十八句、同書に

なるこの湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越んとす。此路旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸として關をこす。大山をのぼつて日既に暮ければ、封人の家を見かけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

として此句がある。「尿前」は「志戸前」「志戸米」とも書き、鳴子温泉の西方にあり、それよりまた西して中山越を過ぎれば出羽國（今の羽前）となる。「封人」は關守の義であるが、前に關守に怪まれたとあるから、これはさうは見られぬ、且つ句意からもただの民家らしいが、其點何とも解し得ない。「尿」は「ばり」とも「し」とも讀むので、地名に由つて「しとする」と讀むべしといふ説もある、併しそれはさまで拘泥するにも及ぶまい。又雪の深い此地方では、一隅には馬屋もあり、一隅には内井戸もあり、風呂場も、薪置場もすべて一棟の下に包容される式の住家様式であらう。かゝる山間邊鄙のところに、風雨に惱まされて空しく三日も滞在を餘義なくされ、夜は蚤と虱にせよられて安き眠りも得ず、やゝまどろむと思へば、枕元の厩でシヤアと馬の尿をする音が耳につく、といふのである。

風流亭

水の奥 氷室 たづぬる 柳哉

（雪丸げ）

尿前の關を越した芭蕉は、最上の庄即ち今の新庄に出で、その風流といふものを訪ふて、風流の「御尋の我宿せまし破れ蚊屋」を發句に、「はしめてかをる風の薰物」と脇をつけ、孤松、曾良、柳風、如柳、木端、報原の八人で歌仙を一巻残した。其時芭蕉の此句に、「晝顔かゝる橋のふせ芝、風流」「風渡」的の變矢に鳩啼て、曾良」の三物がある。風流亭は最上川の支流に臨んで居り、其川の岸には幾本の夏柳が見えたのであらう。それで、この水かみに氷室を尋ねるために、清流に沿ひつゝ、行く途の柳かな、と觸目を叙し、「氷室尋ぬる」に風流を訪ねよる意をふくめたのである。

盛信亭にて

風の香も南にちかし 最上川
（雪丸げ）

「小家の軒を洗ふ白雪、柳風」「物もなく麓は霧に埋れて、木端」の三物がある、即ち前句に引いた歌仙の作者であるから、新庄に於ての吟なることが知り得る。

「薰風自南來」が季語の「風かをる」の出典であり、又最上川は新庄の南方を流れてゐるので、そよそよと通ひ來る風の香も、其方向に近い、と云つたのである。

涼しさを我宿にしてねまる也

(奥の細道)

「奥の細道」の第十九句。同書に

尾花澤にて清風と云者を尋ね。かれは富るものなれども志いやしからず。都に折々かよひてさすがに旅の情をも知たれば、日比とどめて長途のいたはり、さま／＼にもてなし侍る。

として此句がある。「繫橋」に「つねの蚊やりに草の葉も焼、清風」「鹿子立をへの清水田にかけて曾良」他に素英、風流の五人の歌仙がある。

鈴木清風は残月軒と號し、樋口功氏によると紅花を商ふ豪商であつたといふ、江戸には屢往來して芭蕉とは舊交があつたので、そこに落ついて寛いたのである。

「ねまるに」就ては、長唄「越後獅子」に「寐まり寐まらず待ち明かす」とあるのは明かに寐ること

であるが、或地方では安坐することを「ねまる」といふとか、しかし尾花澤地方の人に聞くとこゝろでは、其地方では、正坐することを「ねまる」と云ふさうである、従つて此句も尾花澤の方言たる正坐の意と見るべきものである。

清風を訪ねたら、旅の情も知つてゐる人として、萬事行きとどいたもてなしぶりである。それで現實の涼味と主人の厚意を兼ねたるもの即ち「涼しさ」を、我宿にしてゆつくりと打くつろいで休息する、と其地方の方言に興味をもち、直ちに應用して、主人清風に挨拶したのである。

這出よかひやが下のひさの聲

(奥の細道)

「奥の細道」の第二十句。前句と同所に於ての吟である。

「かひや」に就ては、蚊火屋、魚の葺屋、と見る説もあるが、蠶の飼屋と見るのが正しい。此附近で夏蠶を飼つてゐたことは、此時同伴者曾良にも「蠶飼する人は古代の姿哉」とあるのでも推測される。

蠶室の縁の下でクウ〜と慕の聲がするので、それに這ひ出でよ、と呼びかけた即興吟である。

眉ばきを 俤にして 紅粉の花

(奥の細道)

「奥の細道」の第二十一句。前句と同所での吟である。

「眉掃」は婦人の白粉をはくに用ひる器具で、紅の花の形はそれに似てゐる。一は白粉をはく器具、一はやがて精製されて婦人の唇にぬられる、ともに化粧に關係がある。それで、眉掃を俤にして紅花の花が咲く、と云つたので、此地方は紅花の名産地であつたのである。

行するは 誰肌ふれむ 紅の花

(西華集)

元祿十二年の支考の「西華集」にあつて、晋風氏の「新編芭蕉一代集」俳句の部には元祿年中としてある。然るに同書書翰の部には、元祿三年として、稻束芝馬太郎氏所藏の九日附、吟水宛の

(前略)最上にては「行すへは誰肌ふれん紅のはな」右之句にて可有之候、外ニハ是ハと申程の句も無之候(以下略)

といふ書翰がある。これによると最上にての句を問はれて、この句をあげたものと察せられる、最上を過ぎつたのは元祿二年であるから、書翰の年月は何としてあつても、此句は其時の作とすべきものである。

畑に咲いてゐる紅の花はひなびた姿であるが、あれが精製されて都に出たら、いかなる麗人の唇を篋色に染るだらう、といふのである。

閑。さ。や。岩。に。し。み。入。る。蟬。の。聲。
さ。び。し。さ。や。岩。に。し。み。込。む。蟬。の。聲。
さ。び。し。さ。の。岩。に。し。み。込。む。蟬。の。聲。

(奥の細道)

(初 蟬)

(木 枯)

「奥の細道」第二十二句。同書には

山形領に立石寺と云山寺あり。慈覺大師の開基にて殊清閑の地也。一見すべきよし人のすゝむるに依て、尾花澤よりとつて返し其間七里ばかり也。日いまだ暮ず麓の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巖を重て山とし、松柏年舊、土石老て苔滑に、岩上の院々扉を閉めて物の音きこえず。岩をめぐり岩を這て佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行のみをおぼゆ。

として此句がある。「立石寺」は山形市の東北羽前東村山郡山寺村大字山寺にある。山は奇岩怪石を以て疊み、堂塔山腹に點在して石礎之を縫ひ、風景上野の榛名山と相競ふ。

「物の音きこえず」といふ立石寺の境内に、まづ「しづかさや」と其心が打たれる、その中にたゞ蟬がジイーと鳴いてゐて、其聲があたりの岩石に滲み透る、といふので、蟬の音によつて寂寞の感を一層強く印象せしめる。

五月雨をあつめて早し最上川
五月雨を集めて涼し最上川

(奥の細道)

(伊達衣)

「奥の細道」第二十三句。同書に

最上川のらんと大石田と云所に日和を待。爰に古き誹諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ芦角一聲の心をやはらげ、此道にさぐりあしして、新古ふた道にふみまよふといへども、みちしるべする人しなればとわりなき一卷残しぬ。このたびの風流爰に至れり。

最上川はみちのくより出て山形を水上とす。こてん、はやぶさなど云おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。左右山覆ひ茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをや稻船といふならし。白糸の瀧は青葉の隙くゝに落て、仙人掌岸に臨で立、水みなぎつて舟あやふし、

として此句があるが、此句は前段にある大石田に残した歌仙の發句で、「雲丸げ」には前書が「大石田高野平左衛門亭にて」として、句は「早し」の方があり、「岸に螢をつなぐ舟杭、一榮」「瓜畠いさよふ空に月待て、會良」「星をむかひに桑の細道、川水」等四吟である。

川は平常すら最上の急流なり、時はたゞの川すら水嵩増五月雨頃なり、しかもそれが兼ね具はつてゐるので、五月雨をあつめて早し、と激湍奔流の巖を嘯みつゝ押し行くさまを云つたのである。

有難や雪をかをらす南谷。
 有難や雪をかをらす風音。
 有難や雪をめぐらす風の音。

(奥の細道)

(雪丸げ)

(花摘)

「奥の細道」第二十四句。同書に

六月三日羽黒山に登る。圖司左吉と云者を尋て、別當代會覺阿闍利に謁す。南谷の別院に舎して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。四日、本坊におゐて誹諧與行。

として此句がある。「圖師左吉」は羽黒山下の手向村の人、露丸、又は呂丸と號し、後年京都の旅中に歿し、芭蕉の悼句がある。本坊に於ての誹諧は「雪丸げ」に「住けん人のむすぶ夏草、露丸」「川舟の縁に螢を引立て、會良」の外に鈎雪、珠妙、梨水、圓入の連で、會覺阿闍利も花の座に「盃のさかなに流す花の浪」と一句ある。

盛夏ながらも或るほとりには不斷の雪があつたのだらう、それが涼風の基ともなり、またいかにも神秘的にも感じられる。そこでたゞひたむきに「有難や」と詠歎の詞が口を衝いて出たので、初は多分

原作が「雪をかをらす風の音」即ち薰風の句であつたのだらうが、更に卒直に其場所を「南谷」と据ゑて「風」の家を捨てたので、一見しては季語がないやうにもなつたのである。その南谷は、法力の不斷と清淨の象徴たる盛夏の雪を薰せしめる、といふのである。

悼遠流の天宥法印

その玉を。羽黒にかへせ。法の月
 其玉や。羽黒にかへす。法の月

(泊船集)

(三山雅集)

「三山雅集」に

羽黒山別當執行、不分叟天宥法師は行法いみじき聞え有て、止觀圓覺の佛智才用人にほどこして、あるは山を穿ち石を割て、巨虚が力、女媧がたくみを盡して、坊舎を築き階を作れる、青雲の滴をうけて箕の水をくめぐらせ、石の器、木の工、此山の奇物となれるもの多し。一山擧て其名をしたひ其徳をあふぐ、まことにふたゝび羽山開基にひとし。されどもいかなる天災のなせるにやあら

ん。いづの八重の潮風に身をたゞよひて、波の露はかなきたよりをなむ告侍るとかや。此度やつがれ三山頓禮の序、追悼一句奉るべきよし、門從等しきりにすゝめらるゝによりて、をろく戯言一句をつらねて香の後に手向侍る、いと憚多き事になん侍る。

といふ文がある。天宥法師はなか／＼のやり手で、羽黒山の開基にも均しいほどの功蹟を残したが、そんな人だけに何か官府の忌諱に觸れて、伊豆の國に遠流され、其地に空しくなつた。其追悼句を門從に乞はれて作つたので、折しも盛夏であるのに「月」の句であるのは、或はこの僧の祥月が月の頃で、もあつたのであらう。

かゝる法界に偉功ある天宥法師も、人の裁きによつて遠流され客死した、しかし人ならぬ月光は、其法界の功蹟を愛で、其肉體はかへすことが出来ぬが、其魂はや故山羽黒にかへすナラン、と想像して、佛法と月光とを讚美し、且は法師を愛惜する羽黒の人々に慰藉の意を表したのである。

「其魂をかへせ」といふと、未だ全く法力と月とに信頼しきれずに、其事を請ひ求む意になるので、「かへすナラン」といふよりは劣る。

涼しさやほの三日月の羽黒山

(奥の細道)

「奥の細道」第二十五句。同書に

五日權現に詣、當山開闢能除大師はいつれの代の人と云事をしらず。延喜式に羽州里山の神社と有、書寫黒の字を里山となせるにや、羽州黒山を中略して羽黒山と云にや、出羽といへるも鳥の毛羽を此國の貢に献ると風土記に侍とやらん。月山、湯殿を合て三山とす。當寺武江東叡に屬して。天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯をかゝげそひて、坊棟をしならべ、修驗行法を勵し、靈山靈地の驗效、人貴且恐る。繁榮長にしてめでたき御山と謂つべし。

八日月山にのぼる。木綿して身に引かけ、寶冠に頭を包、強力と云ものに道びかれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏てのぼる事八里、更に日月行道の雲關に入かとあやしまれ、息絶身こゝえて頂上に臻れば、日没て月顯る。笹を鋪篠を枕として臥て明るを待、日出て雲消れば湯殿に下る。

谷の傍に鍛冶小屋と云有。此國の鍛冶靈水を撰て爰に潔齋して劍を打終、月山と銘を切て世に賞せらる。彼龍泉に劍を淬とかや、干將、莫耶のむかしをしたふ。道に堪能の執あさからぬ事しられた

り。岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋て、春を忘れぬ遅ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかほるがごとし。行尊僧正の歌の哀も爰に思ひ出て猶まさりて覺ゆ。惣而此山中の微細行者の法式として他言する事を禁す。仍て筆をとめて記さず。

坊に歸れば阿闍利の需に依て、三山順禮の句々短冊に書。

として、此句及び次の二句がある。

羽黒。月山、湯殿は共に羽前の東村山郡にあり、羽黒より月山まで八里、月山より湯殿まで二里、月山最も高く海拔六千五百尺あり。明治以前は三山共に修驗道の寺院に屬せしが、今は國幣小社出羽神社、官幣中社月山神社、國幣小社湯殿山神社となつてゐる。

ほのかに見ゆる三日月の羽黒の御山の涼しさやナア、と盛夏晚涼の詠歎で「見」と「三日月」は掛け調になつてゐる。

雲の峰幾つ崩て月の山

(奥の細道)

「奥の細道」第二十六句。前句と同じく三山順禮の内月山の句である。

強力に案内せられて八里の道を喘ぎ／＼登る。空を仰げば雲の峰が下界の連山と競ふか如く聳えてゐる。それで、あのやうな雲の峰がいくつ地上に崩れ落ちて、かゝる高き尊き月山となつたのかと心中に疑つたのである。

語られぬ湯殿にぬらす。袂かな

(奥の細道)

語られぬ湯殿にぬる。袂かな

(花摘)

「奥の細道」第二十七句。前句と同じく三山順禮の内の湯殿山の句である。

文中にもある如く、山中の微細の事共は、行者の法式として下山して他言は禁ぜられてゐる。即ち微細の事は語られぬ湯殿山に登て、たゞ神靈の尊さに打たれ、感涙に咽びて濡らす袂かな、と詠歎したのであるが、此山には「戀の山」といふ異名があり、「新勅撰」に「戀の山しげき小笹の道わけて入そむ

るよりぬるゝ袖かな、顯仲」といふ歌があるので、辭句の上にそれらの氣分を匂はせてゐるのである。

又この句は所謂季語がない、名所の句に季のないものゝあるのは、畢竟感激の焦點が其名所に向けられて、他の景物の其間に介在する餘地がないからである。

鶴が岡重行亭

めづらしや山を出。羽の初茄子
めづらしや山を出。テ。羽の初なすび

(初茄子)

(泊船集)

「奥の細道」には

羽黒を立て鶴が岡城下、長山氏重行と云物ふの家にもかへられて誹諧一卷有、左吉も共に送りぬ。とあつて此句はないが、「初茄子」「雪丸げ」には「蟬に車の音添ふる井戸、重行」「絹織の暮いそがしう梭打て、曾良」「閨彌生の末の三日月、呂丸」四人の歌仙がある。

「山を」の「を」が「越」の草體であるので、或は「を」と讀まずに「山越」と讀むのではないかといふ説もある、「山越え」「山越す」もさう見られぬこともないが、「山を」としても何等の不自然さはないので、自分は「山を」と見る。

これまでは山岳地方ばかり經めぐつたが、城下町鶴岡に出て、重行亭での食膳に、初めて茄子が上つたのであらう。それで、山を出てこゝに來り、六月中旬に初めて味はふ出羽の初茄子の珍らしや、と詠歎したので、「山を出る」「出羽」は掛け調になつてゐるのである。

あ。つ。み。山。や。吹。浦。か。け。て。夕。す。ゝ。み
あ。つ。み。山。吹。浦。か。け。て。夕。す。ゝ。み

(奥の細道)

(韻 寒)

「奥の細道」第二十八句。同書に

川船に乗て酒田の湊に下る。淵庵不玉と云醫師のもとを宿とす。

として此句及び次の句がある。不玉は伊藤玄順と云つて酒井侯の藩醫である。「續尾集」によると、

袖が浦に舟を泛べての吟で、「海松かる磯にたむ帆艇、不玉」「月出ば關屋をからん酒持て、曾良」の三吟歌仙を試み、舟より上つて雲龍寺で一巻を滿尾せしめたといふ。「袖ヶ浦」は最上川南方の海濱で、「あつみ山」は酒田の南方十里の西田川郡温海村の温海山「吹浦」は酒田の北方六里の飽海郡吹浦村である。即ち袖ヶ浦に舟を泛べれば、南方温海山から北方吹浦へかけて一眸の下にあることになるのである。

句意は、あつみ山や吹浦やをかけての今宵の納涼なり、といふので、吹浦の下にも「や」とあるべきものが省略されてゐるのである。これをたゞ「あつみ山や」と「や」一つと見ると此句の意味は解されなす。

暑。き。日。を。海。に。い。れ。たり。最。上。川
涼。し。さ。や。海。に。入。たる。最。上。川
涼。し。さ。や。海。に。い。れ。たる。最。上。川

(奥の細道)

(雪丸げ)

(繼尾集)

「奥の細道」第二十九句。前の句と並んである。

「雪丸げ」には「六月十五日寺嶋彦助亭にて」として、「月をゆりなす浪の浮海松、令直」「黒鴨の飛行庵の窓明て、不玉」及び定運、曾良、任曉、扇風の七句あつて、「未略之」とある。令直(或は令道)が即ち寺嶋彦助である。

「涼しさや」は初案で、最上川の日本海にそゞとところ、暫くは河水を押し分ける如くに見える、それを「涼しや」と詠歎したものであり、「暑き日を」は再案で、最上川の水が盛夏の炎暑其ものを海に押し流し入れた、といふので、太陽は日本海に没し、海風晚涼をもたらし來つた感じを力強く表現してゐる。

初。真。桑。た。て。に。や。割。ら。ん。輪。に。切。ん。
初。真。桑。た。て。に。や。わ。ら。ん。輪。に。や。せ。ん。
初。真。桑。四。に。や。断。ん。輪。に。切。ん。
初。真。桑。四。に。や。わ。ら。ん。輪。に。や。せ。ん。

(泊船集)

(芭蕉句選)

(柴ふく風)

(芭蕉翁發句集)

「柴ふく風」に前書が、

あふみや志玉亭にして、納涼の佳興に瓜をもてなして、發句を乞ふて曰、句なきものは喰事あたは
じと戯れければ。

とある。それで瓜食はんと詠んだ句は「初瓜やかぶりしとしを思ひ出づ、會良」「三人の中に翁やは
つ眞桑、不玉」「興にもて、心もとなし瓜の味、志玉」である。

初眞桑を賞して、堅にや割らん輪にやせん、と思つたので、「四つにや」でもどちらでもよい。「四つ
にや斷ん輪に切ん」は口調が悪い。しかしその方が初案であり、且つかゝる即興的の句を再案もせぬ
であらうから、口調の悪い方が正しく、口調のよい方は其口調に引きずられての誤記と見なければな
るまい。「泊船集」には「四にやわらん輪にやせん」を誤りなりとしてゐる。

象 瀉 や。 雨 に。 西 施 が 合 歡 の 花

(奥の細道)

象 瀉 の。 雨 や。 西 施 が 合 歡 の 花

(陸奥千鳥)

「奥の細道」第三十句。同書に

江山水陸の風光數を盡して、今象瀉に方寸を責、酒田の湊より東北の方、山を越磯を傳ひいさを
ふみて其際十里、日影やゝかたふく比、汐風眞砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫
作して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又頼母敷と、蚤の苫屋に膝をいれて雨の晴を待。其朝天能
霽て朝日花やかにさし出る程に、象瀉に舟をうかぶ。先能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとむ
らひ、むかうの岸に舟をあがれば、花の上こくとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江
上に御陵あり、神功皇后の御墓と云。寺を干満珠寺と云。此處に行幸ありし事いまだ聞ず、いかな
る事にや。此寺の方丈に坐して簾を捲ば、風景一眸の中に盡て、南に鳥海天をさゝえ、其陰うつり
て江にあり、西はむやゝの關路をかぎり、東に堤を築て秋田にかよふ道、遙に海北にかまえて浪
入る所を汐ごしと云。江の縦横一里ばかり、佛松島にかよひて又異なり、松島は笑ふが如く、象瀉
はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。

として、此句と次の句がある。「雪丸げ」には前書が「六月十七日朝象瀉雨降、夕止、舟にて瀉を廻
る」とある

「象潟」は秋田縣由利郡塩越村にある芭蕉の松島に比べたやうに景勝の地であつたが、文化元年の地震に土地が隆起して水が涸れてしまつて、今はたゞ田圃に立つて昔の佛を偲ぶのみである。「後拾選集」に「象潟といふ所にてよめる」として「世の中はかくてもへけりきさ潟の海士のとまやをわが宿にして、能因」又「夫木集」に「天にますとよをか姫にこととはむいく世になりぬきさかたの浦、同」などあるので、能因が此地を踏んだことが知られる。又「きさかたの櫻は浪にうづもれて花の上こぐ海士のつり船、西行」といふ歌があつて、干満珠寺には俗に西行櫻といふ老樹があり、また此邊一體に今も猶合歡が多いときく。「西施」はまた「西子」とも云ひ、越王勾踐これを吳王夫差に獻じ、吳王これを溺愛して終に國を傾けたと云はれる美人であるが、同じ美人でも楊貴妃の濃艶なるに對して西施はむしろ愁ふるが如き美人であつたと傳へられてゐる。文中の「雨も亦奇」は蘇東坡が西湖を詠せる詩に、「水光激澗晴偏好、山色空濛雨亦奇、若把西湖比西施、淡粧濃抹總相宜。」とある。象潟の勝景に接した芭蕉は、先づ「象潟や」と其境を提舉し、更に東坡の詩や西施の傳説を連想して、雨の中に其西施が睡れるが如き感じのする合歡の花なるかなと詠歎したのだが、下部は省略法によつたもので、そして「怨むが如し」と感じたのである。

後の方では、西施の睡れる如き合歡の花に、今象潟の雨がふるやナア、と詠歎したことになるので、印象は前句よりも明かになるが、憧憬の地に立つては先づ「象潟や」と云ひ、更に「雨に西施の」と云つた方が情趣が遙かに饒かになる。

沙。越。や。鶴。は。ぎ。ぬ。れ。て。海。涼。し。
腰。長。や。鶴。脛。ぬ。れ。て。海。涼。し。

(奥の細道)

(泊船集)

「奥の細道」の三十一句。前句と同じく象潟での所作で、文中に「浪打入る所を汐ごしといふ」とある其汐越での吟である。「芭蕉句選年考」に

奥羽行に、汐越の里なる金氏何某の家に持傳へし祖翁の自ら書かせ給ふ高詠を敬拜して寫す「象潟の雨や西施がねふの花」夕方やみて所の何がし舟にて江の中を案内せらる「夕晴や櫻にしづむ波の花」腰長の汐越と云ふ所はいと淺うて、鶴下り立ちてあさるを「腰長や鶴脛ぬれて海涼し」武陵芭蕉翁桃青とありて、云々

とある。「汐越」とも「腰たけ」とも云つたらしい。「汐越や」も「腰長や」も先づそこに臨んだことを表し、ふと見れば、そこに鶴が下りて何かあさつて居り、その鶴の脛が打ち寄する波にぬれて、海が涼しい、といふのである。

花の上漕とよみ玉ひけむ古き櫻もいまだ蚶満寺のしりへ
に残りて、陰波を浸せる夕晴いと涼しかりければ、

ゆ ふ 晴 や 櫻 に 涼 む 波 の 花 (繼尾集)

「奥の細道」にはないが、「雪丸」「陸奥千鳥」にもあり、又前句引用の「句選年考」の記事中にもある。

先づ「夕晴や」と廣潤な状景を描き出して、さて、昔西行法師は、花の上漕ぐと折からの花と海とを結びつけて詠んだが、今我は、夕陽海に没せんとして金波銀波の花を織り爲すのを愛でつゝ、其櫻の木のもとに涼しさを味はふといふのである。

文月や、六日も常の夜には似す (奥の細道)
文月の六日も常の夜には似す (泊船集)

「奥の細道」の第三十二句。同書には

酒田の餘波日を重て、北陸道の雲に望む。遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の國一ぶりの關に到る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

として此句があるので、一見しては越中に入つてからの吟と思はれるが、「雪丸げ」には前書が「直江津にて」として「露をのせたる桐の一葉、左栗」「朝霧に食たく烟立分て、會良」以下、眠鷗、此竹、布囊、右雪、茂年の歌仙未完廿句のものがある。紀行の執筆は怠つたが、俳諧は怠つたのではない。文月即ち陰曆七月七日は七夕である、されは六日の今宵も常の夜には似ず、と早やすでに空の色星の輝きが、秋意をふくんで來たこと云つたのである。

荒海や佐渡によこたふ天の河

(奥の細道)

「奥の細道」の第三十三句。同書には何の前書も文章もなく前の句につゞいてあるが、「風俗文選」には「銀河の序」と題して

北陸道に行脚して。越後國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは、海の面十八里滄波を隔て、東西三十里によこおりふしたり。みねの險難、谷の隈々まで、さすがに手にとるばかりあざやかに見わたさる。むべ此嶋はこがねおほく出て、あまねく世の寶となれば、限りなき目出度嶋にて侍るを大罪朝敵のたぐひ遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞えあるも本意なき事におもひて、窓押開きて、暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈で、月ほのくらく、銀河半天にかりて、星きらきらと冴たるに、沖の方より波の音しばしばはこびて、たましおけづるがごとく、勝ちぎれてそゞろにかなしび來れば、草の枕も定らず、墨の袂なゆへとはなくてしぼるばかりになむ侍る。

として此句があり。「雪丸け」には前書が

越後の國出雲崎といふ所より佐渡が嶋へ海上十八里となり。初秋の薄霧立もあへず、さすがに浪も高からざれば、ただ手の上のごとく見渡さるゝ。

とあり。「柴橋」には前書が

越後國出雲崎といふところより沖の方十八里に佐渡が嶋見ゆ。東西三十里餘に横折ふしたり。昔よりこの嶋は黄金多く涌き出て、世にめでたき嶋にて侍るを、重罪朝敵の人々の遠流の地にておそろしき名に立てり。折ふし初秋七日の夜、宵月入果て、波の音とらと物凄かりければ、

とある。ここに注意すべきは、「六日も常の夜には似ず」が六日に直江津での作であるから、出雲崎での此句は地理的に見て其前でなければならぬ。然るに「奥の細道」には前にあるべき此句が反て後にある。しかしそれは九日間の病中の作である爲めに、順序にかまはなかつたと見ればよいが、「柴橋」の前書の「初秋七日」とあるのはいかに見るべきか、若しそれを正しとすれば、六日に直江津に泊つた芭蕉は、七日に出雲崎へ十餘里逆行したことなつて、極めて不自然である。それで自分は「柴橋」の前書は天の川の季語に拘泥した後人の加筆と斷する。又「其袋」には「文月や」の句の次に「其夜北國の海原にむかひて」として此句があるが、これもまた誤りである。

澎湃たる日本海の怒濤を先づ大景的に「荒海や」と打ち眺めて、更に眼を天空に轉すれば、天の川は一大長橋の如くに佐渡に横たはつてゐる、といふのであるが、「横たふ」は他動詞で、それを横たへる何者かがなければならぬ、即ち此場合には「横たはる」とするのが正しいのである。然らば何故に破格によつたか、それは「横たはる」とすれば文法的には正しいが、恨むらくは音調に於て弛緩の感あるを免がれない、ここに於て芭蕉は詩の價値を認識して、むしろ破格でも詩としてよりよきものを得んとした結果（無意識ながら自然に）と見る。

亡父耕兩居士は、神即ち一大自然が、天の川を佐渡へ横たふたので、文法上破綻なき作として常に自分に語つて居つたが、芭蕉が果してさうまで考へたかどうかを疑ふ、それで自分は其説には従はぬが、文法に破綻なく解せんとならば、さう見るより外はないので参考までに記して置く。

入 醫 家

藥 欄 に い づ れ の 花 を 草 ま く ら

（みとせ草）

藥 園 に い づ れ の 花 を 草 ま く ら

（雪丸げ）

「雪丸げ」には前書が「細川青庵亭にて」とあり、「泊船集」には「越後國高田の醫師何某を宿として」とあり、「芭蕉翁發句集」には「高田醫師細川春庵にて」とあり、或る書入本には前書が

みちのくの出羽の名所々々を見廻りて、猶北海の荒磯をつたひ、高砂子あゆみくるしき越の長途に多病いにつかれ、高田といふ所にいたる。此境に良醫棟雪とかや、風雅の聞え遠く傳へたるを尋ねて。とあることが記してある、原本を知り得ざるを遺憾とする。又「雪丸げ」には「萩のすだれをあげかける月、棟芝」「爐烟の夕を秋のいぶせて、更也」「馬のりぬけし高藪の下、曾良」と四句だけある。「春庵」と「青庵」、「棟雪」と「棟芝」何れが是か、とにかく途中病氣に惱んで、高田の醫師細川氏を訪ねての挨拶の句である。

庭前にさまざま薬草が植ゑてある。そこで、今までは長途の旅路に草を枕としたが、こちらでは薬園のどの花を草枕にして御厄介にならうか、といふのである。

一 家 に 遊 女 も 寐 た り 萩 と 月

（奥の細道）

一家に遊女も寐たり萩と月

(泊船集)

「奥の細道」の第三十四句。同書には

今日は親しらず、子しらず、犬もどり、駒かへしなど云、北國一の難所を越て、つかれ侍れば、枕引よせて寐たるに、一間隔て面の方に、若き女の聲二人斗きこゆ。年老たるおのこの聲も交て、物語するを聞けば、越後の國新潟と云所の遊女成し。伊勢參宮するとして、此關までおのこ送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世あさましよう下りて定めなき契、日々の業因いかにつたなしと、物云をきくきく寐入て、あした旅立に、我々にむかひて、行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えかくれにも御跡したひ侍ん、衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ玉へと泪を落す。不便の事には侍れども、我々は所々にとどまる方おほし、只人の行にまかせて行べし。神明の加護かならずつゝがなかるべし、と云捨て出つゝ、あはれさしばらくやまざりけらし。

として此句がある。「親不知、子不知」は有名な難道で、そこを過ぎれば市振の關、それから直ぐに越

中に入るので、何れも越後國西頸城郡に屬する。富士河畔の捨子には食物を與へて過ぎたが、こゝでは相手が相手だけにやんわりと頼みこまれて、芭蕉もさうすげなくも出来なかつたと見えて、諄々として神佛の加護を説き、婉曲に同行を斷はつたのである。

「萩」は即ちかの遊女、「月」は自己をさしてゐる。かの皓々たる中天の月と、嫋々たる萩の花とは、相親んで而して相狎れない。その如く自分達と彼女とも親しんで狎れず、ただ偶々一つ家に宿を共にした、といふのである。

わ せ の 香 や 分 入 右 は 有 磯 海

(奥の細道)

わ せ の 香 や 分 入 道 は 有 磯 海

(卯辰集)

「奥の細道」の第三十五句。同書には

くろべ四十八瀬とかや、數しらぬ川をわたりて那古と云浦に出。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものと人に尋れば、是より五里いそ傳ひして、むかふの山陰にいり、蟹の苦ぶきかす

かなれば、芦の一夜の宿かすものあるまじといひをどされて、かゞの國に入。
として此句があり、「卯辰集」には前書が「越中に入りて」とある。

「黒部四十八瀬」は黒部川の下流が、越中下新川郡に入りて分岐して海に注ぐをいふ。「那古の浦」は放生津の舊名で、今は射水郡新湊といふ。「擔籠の藤波」は往昔の藤の名所で、今は氷見郡宮田村といふ。「有磯海」は伏木と氷見との中間の氷見郡太田村宮田村の沿岸を云ふ。「かよひ來る名のみありその浦千鳥よそになきつゝ戀やわたらん」といふ歌がある。

「奥の細道」に「かがの國に入る」として此句のあるのは、那古の浦で「芦の一夜の宿かすものあるまじと云ひをどされて」、擔籠行はやめて、此句をよみ、やがて加賀の國に入つたので、文章の勢ひから句を後に置いたものである。従て「卯辰集」の「越中に入りて」が一句の前書としては正しいのである。

芭蕉は那古の浦から左折して加賀街道に向はんとする。あたりは早稲が黄金の色饒かに香ぐはしい。しかし擔籠を見なかつたことも心残りである。それで、今かく分け入る右の方は、遙かに擔籠の浦つづきのかの有磯海である、と想ひつゝ、歩を加賀に向けたのである。

塚も動け我泣聲は秋の風

(奥の細道)

「奥の細道」の第三十六句。同書には

卯の花山、くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日也。爰に大坂よりかよふ商人何處と云者有、それが旅宿をとみにす。一笑と云ものは、此道にすける名のほの／＼聞えて、世に知人も侍しに、去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに。

として此句がある。

「俱利伽羅峠」は越中と加賀の國境で、義仲が平家の軍を破つたので有名な古戰場である。小杉一笑は茶屋新七と云ひ、元祿元年十一月六日行年三十六歳にて歿す。

折角金澤へ來たが一笑は昨年冬死んでしまひ、其兄が追善を催すので此句を手向けたのである。

一笑の死を惜んで哭する我聲は、即ち鏃々と吹くところのこの秋の風それである、泉下に感應するものあらば其墳墓も動け、と地下の一笑に呼びかけたのである。

西濱

小鯛さす柳涼しや海士が家
小鯛さす柳涼しや海士が軒

(雪丸げ)

(芭蕉翁發句集)

「奥の細道」にはないが、「雪丸げ」に一笑追善の前に此句があるので、季語は「涼し」と夏であるが同地での作と見る。「西濱」は大野、上金石あたりの海岸であらう。

海士が家の軒に、柳の折枝に小鯛のさしてあるのを見て、いづれ其枝先に葉がついてゐたであらうから、それを涼しやナア、と詠歎したのである。

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜なすび
秋さびし手毎にむけや瓜茄子

(奥の細道)

(韻塞)

残暑しはし手毎にむけや瓜茄子

(花の故事)

「奥の細道」の第三十七句。「雪丸げ」には前書が「少幻庵にいざなはれて」とあり、「花の故事」に「短かさまたで秋の日の影、一泉」「月よりも行野の末に馬次で、左任」以下、ノ松、竹葱、語り、雲口、乙州、如柳、北枝、曾良、流志、浪生の連で未滿の歌仙がある。

少幻庵をたつねると、そこに瓜や茄子が豊かにとり入れられてある、それがいかにも初秋ながら涼しい感じがする。同行の人々に對して、それを手毎にむけや、と命令したので、主ならぬ芭蕉がさう命令することは、即ち主人に對して打ち解けた氣分である。「秋さびし」は誤記であらう。また脇に「秋」字があるから、初案は「残暑しはし」であらう。

白露のさびしき味を忘るゝな

(俳諧世説)

關更の「俳諧世説」に

—元祿二年—

四七七

芭蕉翁元祿行脚の終りならん、金城にしばらく杖を休め給へる時、小春亭にて一夜會合ありしに、その席の饗應、山海の珍物をつらね善美をつくしたるまうけなりし、其終りに後會の事を約しけるに、翁曰く、こよひのもてなし心づかひの程はいふべくもあらず、されど恨むらくは大名の御成りのごとくにして、さらに風雅のさびなしといはんか、我は世を浮草のよるべ定めぬたぐひにして、あるは草深き野邊に晝寢の夢を結び、あるは茂りたる木の下に一むらの雨をしのぐの外、浮世に望みさらになし。況んやかゝる珍物厚味、豈に世を避くるものゝ本意ならんや、もし重ねて我と交りをはんと思ひ給はば、食事の煩ひをひたすらにはぶきたまへ、もし飢ゑば我より乞ひなん。かへすゝも此旨をよく守りて、只風雅のすさびを重んじ給ふべしと申されたり。その次は淺野川下なる一草庵に會席あり。人々前の誠に恥ぢおそれて、其夜はやうやく煎茶の下くゆらすばかり、箸をとるべきものは何にても出さず、やゝ更けゆくまゝに、翁曰く、席もはや闌なれば人々の腹空しかるべし、冷飯あらば鉢ながら出さるべしとありければ、主人いとやすき事なりと云ひつゝ、手づから鉢を抱きて來り、其まうけの心ゆかぬを謝するに、翁はほゝゑみながら、諸禮停止は風雅の舊制なり、何の謝する事あらん、皆々近う圓居し給へとて、茶漬一二椀さらさらと打ちしたため、風雅

はかくこそあらまほしけれ、すべて酒食の奢りに隙を費して、俳諧の味をわするるは遊里戯場の物好にして、風雅の席には無下なりといふべしと示し申されける。金城の人々此詞に感じ、それよりしてはおのづから奢りを誡め、風雅に粉骨を致す事になりて、後に至りても、北枝、暮柳舎の如き諸國に名高く呼ばれたる人の出來し事も、いはゞかゝる教誡を世々によく守りぬる故にこそ。是ひとへに翁の訓誨のまめやかなるによりて、金城の人々初めをつゝしむ事をよく辨へ、今の世までも語りつたへて終りをよくするの基とはなりけらし。

として此句をあげてある。小春は金澤の酒造家で、宮竹屋伊右衛門と云ふ。此句は「一葉集」及び晋風氏の「新編芭蕉一代集」には猶考證を要すべきものとしてゐる。

句意は説明を要せぬほど明かで、人々よ、庭前の草木に置けるあの白露の如き、さびし味を忘るゝなといふのである。

ちる柳あるじも我も鐘をきく

(俳諧世説)

この句も「俳諧世説」に

句空は金城卯辰山に住して、庵を柳陰軒といふ、(中略)翁も旅寝の杖をとどめ給ひ、いと睦しく語らひ給ふ。

として此句がある。卯辰山は臥龍山とも云ひ、金澤市の卯辰の方にあたる。

句空が柳陰軒に於ける即興で、柳がはらくとちる、折から寺の鐘がごうんと響く、それを主も客も共に耳にする、といふのである。

途中

あか／＼と日はつれなくも秋の風

(奥の細道)

「奥の細道」の第三十八句。金澤から小松に到る途中の吟で、「雪丸げ」には前書が

旅愁なくさめかねて、ものうき秋もやゝ至りぬれば、流石目にも見えぬ風の音つれもいとしくなるに、残暑猶やまさりければ。

とあり、「一葉集」には「晚稻の笥細う聞ゆる、光清」といふ脇だけある。

陰曆七日末で、さすがに秋と知らるる風がわたり、日はあか／＼とつれなくも西に春かんとす、といふので、いかにも秋猶暑き旅の風情が偲ばれる。涼菟の「蕉翁頭陀物語」に、芭蕉がこの句の「風」を「山」として北枝に示したら、北枝は、「山」は据わり過ぎて景色が廣くないと云つた。すると芭蕉はさすがに加賀に北枝ありと云はれるだけある、この句は初から「風」とすべきだが、聞く人もなからうかと思つて「山」と断つたのだと云つたとある。無論眞疑は定め難いが、「風」と「山」で一句の價値の違ふことは其通りで、「秋の山」ならば敢て芭蕉をまつまでもない、「風」にして初めて生命があるのである。

小松といふ所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

(奥の細道)

しほらしき名や小松吹萩すゝき

(泊船集)

「奥の細道」の第三十句。「雪丸げ」には前書が

北國行脚の時、何れの野にや侍けん、暑さぞまさるとよみ侍りし撫子の花さへ盛過行頃、萩薄に風のわたりしをちからに、旅情をなぐめ侍りて、

とあり、又「一葉集」には「露も見知りて影うつす月、鼓蟾」「踊の音淋しき秋の藪ならん、北枝」以下、曾良、斧卜、塵生、志格、夕市、致益、観生等小松連衆の四十四連句が一巻ある。小松は金澤の西南五六里、能美郡に属する。萩に薄に、さらに小松に風が吹いて、小松とはげにしをらしき土地の名やナアと、地名のなつかしさと秋涼の情を云つたのである。

加賀小松にて

ぬれて行。人もおかしや。雨の萩

(泊船集)

ぬれて行や。人もおかしき。雨の萩

(印の竿)

「雪丸げ」には前書が「観水亭雨中意」とあり、「一葉集」には「七日廿六日観生亭にて」として、

「芒かくれに芒ふく家、観生」「月見とて漁にも出ず船あげて、曾良」「干ぬかたびらを待かぬる也、北枝」の四吟で、百韻未完の連句がある。「観生」が正しく、「観水」の誤りなることは「しをらしき」の巻の連衆を見ればわかる。又「印の竿」には發句が少し違ふだけで、脇以下は同じであるが、作者名が享子、曾良、北枝、コ蟾、志格、斧卜、塵生、季邑、視三、夕市とある、これによると「観生」と「享子」とは同人であるかに思はれる。

観生亭の脇目吟で、雨をふくめる萩の風情もよいが、其ほとりをぬれながら往き來する人もなか／＼におかしやナア、と其さまを愛で、詠歎したのである。

むざんや。な甲の下のきり／＼す

(奥の細道)

あなむざんや。な甲の下のきり／＼す

(卯辰集)

「奥の細道」の第四十句。同書には、

此所太田の神社に詣。眞盛が甲、錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝公より玉はらせ給ふとか

や、げにも平士のものにあらず、目庇より吹返しまで、菊唐草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鉄形打たり。眞盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて此社にこめられ侍るよし。樋口の次郎が使せし事共まのあたり縁起に見えたり。

として此句があり。又「猿蓑」には前書が、

加賀の小松と云處、多田の神社の寶物として、實盛が菊から草のかぶと、同じく錦の切れ有。遠き事ながらまのあたり憐におぼえて。

として、「むさんやな」の句がある。「一葉集」に「あなむさんやな胃の下のきり／＼す、芭蕉」力も枯れし霜の秋草、享子」「渡し守綱よる丘の月かげに、鼓蟾」以下三吟の歌仙がある。

太田神社は小松町にあり、延喜式内の舊社で今は縣社となつて居り、土地では多田八幡とよんでゐる。齋藤實盛は越前の人で、初めは源義朝に屬し、後に平宗盛に従ひ、義仲の北國に起るや、髪を染めて出陣し、加賀篠原の戦に手塚太郎に組敷かれて討死したのは周知のことである。「あなむさんやな」は、謠曲「實盛」の一齣に、

樋口まわりて唯一目見て、あな無慙やな、齋藤別當實盛にて候ひけるぞや。

とあるのから來てゐる。「甲」は「よろひ」であるが、いつとなく「かぶと」に誤用されることになり此甲も「かぶと」と讀むのである。

實盛の白髪白髯を染めた冑首を、きり／＼すの髭に連想し、また秋の哀れを告げる鳴く音も思ひよせ、それを混然同一物視してしまつて、あな無殘やナア、と謠曲の詞を假り來つて詠歎し、再案して調をととのへる爲めに「あな」の二字を取り去つたのである。

石山の石より白し秋の風

(奥の細道)

「奥の細道」の第四十一句。同書には

山中の温泉に行ほど、白根が嶽跡にみなしあゆむ。左の山際に觀音堂あり、花山の法皇三十三所の順禮とげさせ玉ひて後、大慈大悲の像を安置し玉ひて、那谷と名付玉ふとかや、那智、谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇岩さまさまに、古松植ならべて、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地也。

として此句がある。小松から山中温泉に行く途中、那谷の観音に詣でゝの句で、寺は江沼郡那谷村に在り、自生山巖谷寺と云ふ眞言の古刹で、山の半腹の岩石を穿ちて堂を設け、境内は奇巖怪石が多い、花山法皇其勝を賞させ給ひて、西國三十三番の札所の第一番紀州の那智と、第三十三番の美濃の谷組の地名から採つて、那谷と名づけ給ふたといふことである。

折から吹く秋の風が、岩石重疊たる此那谷の石山の白さよりも一層白し、といふのである。四季を四方に配すれば秋は西にあたり、また色を四方に配すれば白が西にあたる、即ち秋風は白風である。

山中や菊はたあらぬ湯の匂ひ

(奥の細道)

山中や菊は手折らじ湯の匂ひ

(山中集)

「奥の細道」の第四十二句。同書に

温泉に浴す。其功有間に次と云。(ここに此句があつて)あるじとする物は久米之助とていまだ小童也。かれが父俳諧を好み、洛の貞室、若輩のむかし爰に來りし比、風雅に辱しめられて、洛に歸て

貞徳の門人となつて世にしらる。功名の後、此一村判詞の料を請すと云。今更むかし語とはなりぬとあり。又「芭蕉翁眞蹟拾遺」に

北海の磯つたひして加州やまなかの涌湯に浴す。里人の曰、このところは扶桑三名湯の其一なりと。まことに浴する事しばしばなれば、皮肉うるほひ筋骨に通りて神心ゆるく、偏に顔色をとどむることちす。彼桃源も舟をうしなひ、慈童が菊の枝折もしらず。「山中や菊はたあらぬゆのにはひ」元祿二仲秋日。

とある。然るに「韻塞」に「加州山中の重陽」とあるのは、ただ句の構想に捉へられたので、「奥の細道」は九月六日美濃の記事で終つてゐること忘れたものである。

「久米之助」は泉屋といふ屋號で、此時芭蕉から桃妖といふ號を得て入門した。父は又兵衛と云つたとのことである。

此句は初案が「じ」で、再案が「ぬ」である。初案では、此湯は日本三湯の一で、攝州有馬に次ぐ効があり、武陵桃源を尋ねて上る舟も用がなく、菊の露を飲んで八百壽を保つたといふ菊慈童の如く菊の枝を折る必要もない。故に此湯の匂を嗅ぐのみで、敢て菊は手折らじ、と云つたのである。

再案は、「菊は」とあるに照應しては、「手折らず」とあるのが相當であるのに、「手折らぬ」とあるので、或はこれを怪しむ者があり、或は又「手折らぬ湯」とつゞけて讀み下さんとする者がある。それは共に(俳句文法は一般文法に比して)専ら云起、又は結尾に省略法を用ひることを閑却してゐるから誤るのである。即ち此句は、我は今こゝに入浴して、其効を信ずる湯の匂ひにぞ、菊は手折らぬ、といふので「ぞ」からかゝつて「ぬ」で結んだので、初案に比すれば一層強調されてゐるのである。

加賀山中、桃妖に名をつけ給ひて

桃の木の 其の葉ちらすな秋の風

(泊船集)

和泉屋久米之助に號をつけての吟で、「詩經」の周南に「桃之夭々、其葉蓁々、之子于歸、宜其家人」といふ一齣がある、それに因んで、この少年の爲めに其葉の蓁々と茂れかすと桃妖といふ號を選んだ、秋の風よ其葉を散らすな、と少年久米之助の前途の多祥ならんことを希つたのである。

高瀬漁火

い。さ。り。火。に。か。じ。か。や。浪。の。下。む。せ。び
か。じ。り。火。に。か。じ。か。や。浪。の。下。む。せ。び

(卯辰集)

(東西夜話)

「奥の細道」にはないが、支考の「東西夜話」の山中の條に、

此地に十景有り、先師むかし高瀬の漁火といふ題をとりて(こゝに此句ありて)今宵桃天亭に此句を評して曰く、あかりに驚かす魚はあまた有りながら、むせぶといふ一字によせていはゞ、河鹿の外あるまじ、一句の魂を見るといふは此あたりなるに、鮎も鰻も同じ心なりと思ふ人には共に俳諧を言ひ難し。

とある。

「かじか」には「河鹿蛙」と魚類の「鰈」と二種ある、「鰈」は水中に在つてごり／＼といふ如き音を發するので「ごり」ともいふ、加賀邊に多い魚である。

かじり火が水に映るので、鰈はや浪の下で咽ぶナラン、と想像したのである。

湯の名残今宵は肌の寒からむ (杵原)

「奥の細道」にはないが、勾空の「杵原」に桃妖に書いて與へた事が記してある。小松に滞在の後、いよ／＼明日は此温泉をあとにして越前に向ふので、その名残の今宵は床についても肌の寒からんと、思つたのである、

今日よりや。書付消さん笠の露 (奥の細道)
今日よりは。書付消さん笠の露 (芭蕉句選)

「奥の細道」の等四十三句。同書には

曾良は腹を病で、伊勢の國長嶋と云所にゆかりあれば先立て行に「行く／＼てたふれ伏すとも萩の原曾良」と書置たり。行くもの、悲しみ、残るもの、うらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふがことし。予も又

として此句がある。「前途三千里のおもひ胸にふさがりて」と長途の旅程に健康を危ぶんだ芭蕉は、どうやら無事に過ぎ来たが、反て同伴の曾良の方が病に悩んで、山中から師と別れねばならなくなつたのは妙なものである。

江戸を出てから約五ヶ月、松嶋、象潟の勝景に、或は尿前、親不知の艱苦も二人連であつたが、今一人は先きに伊勢をさして行くのは、あだかも並んで飛んでゐた鳧がわかれ／＼になつて、雲に迷ふやうである。同行二人と記してある笠の文字を、其笠に置く露をもて、今日よりはや消さん、といふのである。「今日よりは」といふと、消すことがあまりに確實性を帯び過ぎる、實際にごしく消して終ふのではなく、假想であるから「今日よりや」の方が趣きがある。

庭掃て出る。や寺に散柳 (奥の細道)
庭はきて出ば。や寺に散柳 (鳥の道)
庭はいて出ば。や寺にちる柳 (泊船集)

「奥の細道」の第四十四句。同書に

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地也。曾良も前の夜此寺に泊て「終宵秋風聞やうらの山、曾良」と残す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞て衆寮に臥げ、明ぼの、空近う讀經聲すむまゝに、鐘板鳴て食堂に入。けふは越前の國へと心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙、硯をかかえ、階のもとまで追來る。折節庭中の柳散れば（ここに此句があつて）とりあへぬさまして草鞋ながら書捨つ。

とある。出立際に若僧どもに責められて、庭前の曬目を書き與へたのである。一宿にも灑掃して去るのが禪家雲水の禮であるから、この禪寺に泊つた芭蕉も、或は座敷位は片つけて手傳つたかも知れない、それを「庭」と轉じたところが俳諧である。

庭前を見やれば今柳がらつた、一夜の宿を乞ふた雲水我もまた、庭を掃いて出づるや、と詠歎したのである。「出ばや」はそれを期することになる、實際掃かぬものなら、掃たとする前句の方が反て趣がある。

くま坂さかと云所にて

熊坂	が	其	名	や	い	い	の	玉	祭	(卯辰集)
熊坂	が	ゆ	か	り	や	い	つ	の	玉	祭
熊坂	を	と	ふ	人	も	な	し	の	玉	祭
										(笈日記)
										(翁草)

東海道赤坂の宿で、牛若丸にうたれて死んだ強盜の張本熊坂長範は加賀の生れで、山中から二里、大聖寺の近く江沼郡三木村に熊坂といふところがあり、そこが彼の故郷と云はれてゐる。此句は「奥の細道」にはなく、また山中温泉すでに「仲秋」と記してゐるので、魂祭の句は季節が合はぬやうであるが、必ずしも魂祭の實景に接してのものとも見なくもよからう。

大聖寺から越前に入る途中熊坂を過ぎて、有名なりとはいふものゝ、香しからぬことで名高いのだから、熊坂の其名はやいつの魂祭にまつらるゝナラン、と所謂無縁佛であるだらうと想像したのであり。第二は、熊坂がゆかりはやいつの魂祭するナラン、といふので、第一の祭られざる熊坂を主とするよりは、第二の憚りて祭らぬ熊坂の縁者を主とする方が趣きがある。

物書て扇ひきさくさく別かな
 (一葉集)

物書て扇引きさくさく別哉
 (奥の細道)

物書て扇子引きさく名残哉
 (古今抄)

物書て扇子引きさく名残哉
 (泊船集)

「奥の細道」の第四十五句。同書に

丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又金澤の北枝といふもの、かりそめに見送りて此處までし
 たひ来る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞ゆ、今既別に望みて。
 として此句がある。然るに「卯辰集」には北枝の詞として

松岡にて翁に別侍し時あふぎに書て給る、

として「笑ふて霧にきほひ出ばや」と脇句がある。丸岡は越前坂井郡で、松岡は同吉田郡である。

此句のあとに「五十町山に入て永平寺を禮す」とある、永平寺は吉田郡志比谷村志比にあつて、丸岡
 からは三里ほど、松岡からは五十町位であるから、松岡の方が正しい。北枝は金澤から、山中温泉、

大聖寺と、こゝまで伴ひ來つて、こゝで別れ去るにあたつての旅中途別吟である。

別離の詞を、或はさう見なくもよい、とにかく物を書いて、それを二つに裂く、即ちこゝで相別るゝ
 名残かな、と詠歎したのである、

淺水のはしを渡る時、俗にあさうづといふ、清少納言の

橋はと有、一條、あさむつとかける所也。

あさむつや 月見の旅の明はなれ (其 袋)

此句は「奥の細道」にはないが、同書に、永平寺に詣で、福井に入り、等裁を訪ねてからの條に
 其家に二夜とまりて、名月はつるがの港にとたひ立。等裁も共に送らんと裾おかしうからけて、路
 の枝折とうかれ立。漸白根が嶽かくれて、比那が嵩あらはる。

あさむつの橋をわたりて、玉江の蘆は穂に出にけり。

とある時の吟である。「あさむつ」は淺生津、淺水、淺州津、朝六、あさんず、など種々に記されて

あるが、浅水が其正しい稱呼であらう、現在では足羽郡麻生村大字浅水で福井から一里程南にある。麻生津の橋はまた黒戸の橋ともいひ、「催馬樂」にも「あさんづの橋の轟々と、降りし雨のふりにし吾を云々。」と、又、清少納言の「枕草子」にも「橋は、浅むつの橋、長柄の橋、天彦の橋、濱名の橋、一つ橋、うたゝねの橋、云々」とあり。古歌にも「朝むつの橋は忍びてわたれどもとどろくと鳴るぞわびしき」などあつて、所謂歌枕として知られてゐる。

「あさむつや」は地名の「浅生津」と時間の「朝六」とを兼ねて居り、我は今敦賀に月見せんとの旅の明はなれ方にこゝを渡る、といふ意と、月見の旅の明はなれ方即ち首途である、といふ意をも兼ね含んでゐるのである。

玉 江

月見せよ玉江の蘆を刈ぬ先。
月見せよ玉江の蘆を刈ぬへき。

(晝寐の種)

(芭蕉句選)

「奥の細道」にはないが、前句に引いた文章で、前句に続くべきものであることが明かである。「菅菰抄」に

福井より麻生津村の方へ二町斗行けば赤坂に橋三ありて、其中の橋を玉江の古蹟とす、とあり、「後拾遺集」に「夏刈の玉江の蘆をふみしだき群れゐる鳥の立つ空ぞなき、重之」とある、これまた名所である。

紀行文中にある、「玉江の芦は穂に出でにけり」は、芦の穂が出たといふのと、その穂に出た芦が見え初めたと、兩様の意義を兼ねてゐて、それらからまた前掲の歌にも想を走せて、人々よこゝ玉江の芦を刈らぬ前に月見をせよ、と云つたのである。或はまた、月を見せよ、とも解し得ぬでもないが、自分は前説を採る。

湯 尾

月に名を包みかねてやいもの神

(晝寐の種)

「奥の細道」の前條のつゞきに、

鶯の關を過て、湯の尾峠を越れば、燈が城、かへる山に初雁を聞て、云々とあるところに相當する。

湯の尾峠は南條郡湯尾村にあつて、そこには疱瘡除の孫杓子を御守りとして出す社がある。月光即ち其神の徳には、さすがの疱瘡神も名を包み隠しかねてや忽ち退散するならん、と八月十三日の皓々たる月光と、疱瘡除の神の効験とを連想しての想像である。

燈 山

義 仲 の 寢 覺 の 山 か 月 悲 し

(晝寐の種)

これまた前句と同時の吟である。燈山は火打山とも書いて、壽永二年の五月小松三位中將維盛が北國征討に向つて、木曾義仲の出城燈城を陥れた古跡で、城趾は現今の南條郡今城村燈にある。壽永の古蹟を仰げば、この燈山は嘗ては義仲が寢覺に眺めた山か、今は當年の遺業もたゞ夢に歸して

しまひ、折しも八月十三日の月のみ蒼空にかゝつて、往昔を物語るが如くに悲しい、と懷古の感に打たれたのである。

月 清 し 遊 行 の も て る 砂 の 上。
月 清 し 遊 行 の も て る 砂 の 露。

(奥の細道)

(其 袋)

「奥の細道」の第四十六句。同書には

かへる山に初雁を聞て、十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。その夜月殊晴れたり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて松の木の間にもり入たる、おまへの白砂霜を敷るが如し。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈土石を荷ひ、泥濘をかはかせ、參詣往來の煩なし。古例今にたえず、神前に眞砂を荷ひ玉ふ。これを遊行の砂持と申侍ると、亭主のかたりける。

として此句があり「其袋」には

氣比の宮へは遊行上人の白砂を敷ける古例ありて、この頃もさる事ありしといへば

として此句がある。「氣比」は古くは「筭飯」とも書く、敦賀の東端にある仲哀天皇行宮の趾で、今は御食津彦尊、仲哀天皇、神功皇后を祀れる官幣大社氣比神宮である。遊行二世の上人陀彌陀佛が此社の参道の泥濘なるを敷いて、自ら草を刈り砂を運んで道路を清めたことがあるので、爾來其派の法統をつぐ上人が此所に來れば、必ず其事を自らする、そして参詣者はそこに備ひつけの下駄を借り履いて、穢れた履物では其砂を踏むことを忌む。丁度芭蕉が参詣した少し前に新に砂を布いたところであつた。

天には八日十四日の日光隈なく、地には近頃撤いた白砂清らかに、共に萬象を淨化し、此宮の神靈と相融合してゐる。其光景に打たれ、あらゆるものの清淨なるさまを籠めて「月清し」と云つたのである。

名月や北國日和定なき

(奥の細道)

「奥の細道」の第四十七句。同書に

十五日亭主の詞にたがはず雨降、

として此句がある、即ち前夜宿の主じが「越路の習ひ猶明夜の陰晴はかりがたし」と云つたのが適中して、日中から雨が降つたのである。

一般には此句を、名月に、主じの云ふ通り雨が降つて、北國日和は定めがない、と解するが、前書が「十五日の夜」ではなくして「十五日」とあるのは日中の意と見るべきではなからうか、又一步を譲つて「十五日」を直ちに十五日の夜と見るとしても、雨の名月をたゞ「名月や」で適當であらうか、更に數歩譲つて、この「名月」は月其ものをいふのでなく、名月の夜の意と解すべきものとしても、前夜宿の主人の云つた「明夜の陰晴はかりがたし」にたゞ「名月や」と五文字置いたのでは、わが芭蕉の作品としては餘りに平凡に失する。

此句は、十五日は日中から雨である、そこで芭蕉は思へらく、昨夜あれほどの晴れが、今日はいかくの通りの雨で、げに主じの云つた如く、北國日和はあてにならぬ、がしかしました、それを裏うへに、今のこの雨がやがては晴れて、或は今宵の名月もや昨夜の晴が今の雨となりしが如く、また今の雨が

晴れと變るやうに定めなきナラン、と想像して、此地の名月に憧憬してゐるだけに、日中の雨に失望した中にも、主人の云つた變化多き北國の天候といふ言葉に、一縷の期待をつないで、我と我を慰めてゐるのである。或は持つて廻つた解釋と難ずる人もあらうが、第二終止「なき」で結んでゐるのは、云起に「が」「ぞ」「疑問や」のあることを示して居る、そして「北國日和が」「定めが」「北國日和ぞ」「定めぞ」と假定してみても、いづれも働きがない、それで自分は前に云ふ如き解を採るのである。しかし芭蕉のこの期待は空たのみに終つて、其夜も雨であつた、従つて此句が一層誤解を引き起し易いが、此句を詠んだ日中には、其夜の陰晴は何れとも定めがたしとするところに、此句の作意はあるのである。

中秋の夜は敦賀にとまりぬ、雨降りければ

月いづこ鐘はしづみて海の底

(草庵集)

月いづこ鐘はしづめる海の底

(四幅對)

「四幅對」には前書が

おなじ夜あるじの物語に、此海に釣鐘のしづみて侍るを、國の守海士を入れてたづねさせ給へど、龍頭のさかさまに落入て、引あぐべき便もなしと聞て、

とある。沈鐘傳説は各地にあつて、これも其一つである。期待した望の夜は雨にたゞられてつれづれに旅宿の主人と語り合つて、こんな傳説を聞いたのである。

鐘は沈みて今猶海の底にあるといふが、期待した今夜の月はさて何處にあるであらうか、と無月を惜んだのである。

濱

月のみか雨に相撲もなかけり

(晝寐の種)

これも同夜の吟で、宿の主じが、此濱の行事の角力も雨で中止になつたと話したのであらう。そこで我が期待した月のみかは、この雨のために、この土地の人々が楽しみにしてゐたであらう角力もな

りけり、と失望者が失望者に同情したのである。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

(奥の細道)

寂しさや須磨にかちたる浦の秋

(泊船集)

「奥の細道」の第四十八句。同書に

十六日空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと種の濱に舟を走す、海上七里あり。天屋何某と云もの破籠、小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまた吹着ぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、佗しき法花寺あり。爰に茶を飲、酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ感に堪たり。

として此句及び次の句がある。「種の濱」は敦賀灣の立石崎に到る中間にあり、現今は敦賀郡松原村色の濱といふ。「ますほ」に就ては種々の説があるが、こゝは「眞緒」の義で、此濱の貝の殻の赤きをいふ。「異本山家集」に「汐けふりますほの小貝ひらふとて色の濱とはいふにやあるらむ、西行」と

いふ如く濱の名も貝の色の美しいことから得たのであらう。

嘗て須磨に遊んでそのさびしさを味はつたが、今この色の濱の秋は、寂しさがむしろ須磨に勝ちたるラン、と心中に比較想像したのである。

波の間や小貝にまじる萩の塵

(奥の細道)

波の間に小貝にまじる萩の塵

(芭蕉句選)

「奥の細道」の第四十九句。前句と並んでゐる。

いろの濱の海岸には赤い小貝が打ち寄せられてあり、そこに萩の花も散つて交つてゐる、といふ矚目吟である。

いろの濱に誘引れて

小萩ちれますほの小貝小盃

(薦獅子)

―元祿二年―

「奥の細道」にはないが同時の吟である。
色の濱のますほの小貝に、また我々が酌みつゝあるこの小盃に、小萩よ散れと興じたのである。

葛の葉はむかしめきたる紅葉哉 (信夫摺)

元禄二年の「信夫摺」にあるので、同年又は其以前の作と見る。

葛紅葉は、楓、ぬるて、柞などのやうに鮮かでなく、少し黝すんだ感じがする、それで昔めきたる紅葉かな、と古代色と見なして詠歎したのである。

胡蝶にもならで秋ふる菜むし哉 (後の旅)

「芭蕉句選年考」には元禄二年とし、晋風氏の「芭蕉句選定本」にも同じであるが、同氏の「新編芭

蕉一代集」には四年説としてある。しかし「後の旅」の

元禄二年のはじめの夏、深川の庵も人に遣りて、那須野の原に時鳥を待ち、蓬葎の敷蔀の下にきりきりすを聞て、千百里の嶮難終に頭を白うして、美濃の國我里にうつり給ふ。句どもあまたあり。

此の事は奥の枝折に残し給へば大方は漏しつ、「胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉、芭蕉」「たねはさびしき茄子一もと、如行」如斯からびたる吟聲ありて下の句をす。

とあるに由りて、「奥の細道」種の濱の條のつゞき

露通も此港(敦賀)まで出むかへてみの國へ伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より來り合、越人も馬をとばせて如行が家に入集る。前川子荊口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふごとく、且悦び且いたはる、云々とある時の吟たる事が明かである。

胡蝶は翩々と翱翔するが、其胡蝶にもならずに碌々と秋を経る菜虫かな、と詠歎したのであるが、一面自己の徒らに歲月を過ぎすといふ主觀も含んでゐる。

斜嶺亭。戸をひらけば西に山あり、伊吹といふ。花にも
よらず雪にもよらず、只これ孤山の懐あり。

其まゝに月もたのまじいぶき山
其まゝよ月もたのまじいぶき山

〔笈日記〕
(後の旅)

「後の旅」に前句に続いて出てゐる、これも大垣での吟である。

孤山は西湖のほとりにあつて、林和靖は其麓に住んでゐた、伊吹山はそれに似通つてゐて、其まゝに
毅然として花にもよらず、雪にもよらず、また月をも頼まじ、と伊吹山の姿を賞し、併せて主じ斜嶺
の風格をもたへたのである。

恕水子別墅にて即興

こもり居て木の實草の實ひろはゝや

(後の旅)

「後の旅」に前の句につゞいてある。同大垣での吟である。
暫く滞在して、旅の疲れをも癒し、木の實草の實など拾はゞや、といふので主じのもてなしの心置き
なきさまが思はれる。

左柳亭

はやくさけ九日もちかし菊の花
はやう。咲九日も近し宿の菊。

(笈日記)
(桃の白實)

これも大垣滞在中の吟で、「心うきたつ宵月の露、左柳」「新島去年の鶉の啼出して、路通」以下、
文鳥、越人、如行、荊口、此筋、木内、残香、曾良、斜嶺の歌仙がある。
秋もすでに九月に入つて、九日も近くなつたから、此宿の菊の花よ早く咲け、と庭前の菊の蒼を見て
の即興である。

畫 讚

西行の草鞋もかゝれ松の露

(笈日記)

「芭蕉翁發句集」には貞享五年とし、晋風氏の「新編芭蕉一代集」にもそれによつて元祿元年説とされている。しかし「笈日記」に大垣の部にあるから。そこでの作と見るべきものではなからうか。さすれば元年秋は大垣に居ない。尤も畫讚だから必ずしも季に拘泥すべきものではないが、自分はやはり此時の作ではないかと思ふ。「芭蕉句選年考」に「或る行脚の僧の言、松に草鞋のかゝりたる圖の讚とす。」とある、いかさまさうであらう。

松に露の置いた風情はなか／＼よいが、更に希くは、西行上人の旅路にはき捨てた草鞋もかゝれかといふので、例の西行崇拜がこゝにも出たのである。

木因亭

かくれ家や月と菊とに田三反

(笈日記)

「芭蕉句選年考」は貞享元年「野晒紀行」の時の吟ではないかといひ、晋風氏の「新編芭蕉一代集」は元祿二年としてゐる。貞享元年には木因亭で「死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮」の吟があるので、自分はこの句は元祿二年とする晋風氏説に左袒する。

大垣の谷木因の宅での吟で、こゝは月を賞する爲めにも、また菊を賞する爲めにも、恰好な田が三反あつて、まことに隱栖によき家やナア、と詠歎したので、「田」はただ水田の意ばかりでなく、田畑を兼ねてゐるのである。又「芭蕉翁句解」に一休禪師の「山居せば上田三反味會八斗小ものひとりに水のよき里」に因んでゐるとあるが、或はさうかも知れない。

蜻蛉やとりつきかねし草の上

(笈日記)

「笈日記」中の「瓜畑集」にある、晋風氏の「新編芭蕉一代集」の元祿二年説とするにしたがふ。蜻蛉がすい／＼と飛んで、將に草に憩はんとしてはまた其まゝすがりもやらで飛んでゐる。それは、

そよ風にうごく草の上に、蜻蛉がや取りつきかねしナラン、と想像したので、蜻蛉が取りつきかねしとは違ふのである。

みのゝくに朝長の墓にて

苔埋む 蔦の うつゝ の 念佛 哉 (花の市)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿四年前としてあるが、元祿三四年の秋は美濃の地を踏まぬから、元祿二年前としてよからう。更に考ふるに或は貞享元年かもしれぬ。

源義朝の次男中宮大夫進朝長は生年十六才にして父の手にかゝつて死んだ、そのあはれな思ひ出の墓は、美濃國不破郡青墓村にあつて、大垣から一里ばかりの距離である。

「蔦のうつゝ」は、駿河國宇津谷峠は歌枕として「蔦の細道」の名を負つてゐるので、それを引用したのである。

苔の埋むるありさまは、蔦の細徑てふうつの山路のその如く、うつゝのまゝに誦する念佛かな、と、詠

歎したのである。

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ (奥の細道)
蛤のふた見へわかれ行秋ぞ (後の旅)

「奥の細道」の最終句。同書大垣滞在の條に續いて

旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮おがまんと又舟にのりて、として此句があり、「後の旅」に

翁此所より伊勢にうつり給ふ時、我舟にて送り侍るに。
と木因の附記がある。「硯かと」の句下参照。

此句は、縁語を疊みかけ、て頗る複雑してゐる。先づ滞在中懇ろにしてくれた人々に相別るゝことは、蛤の蓋と身とを二つに引き分けられる思ひであるといふ意。その蛤の蓋から「二見」にかけて蛤の「二見」と枕辭にして居り、又「蓋」と「み」から「別れ行く」にかゝり、「別れ行く」と「行く

「秋」と縁語の重疊で、要するに人々に別れを惜しみ、伊勢の二見へ志す、そしてそれが暮秋の頃である、といふことを「ぞ」と強調したので、實に技巧の極致である。

たふとさに皆をしあひぬ御遷宮

(花つみ)

「泊船集」には前書が「内宮は事をさまりて、外宮の遷宮を拜み侍りて」とある。伊勢の神宮は滿二十年毎に改築する定めで、元祿二年が其年にあたつてゐる。御遷宮の行事の尊さに、諸國から参拜に入り込んだ人々が、みな押し合ひぬ、と神靈のたふとさと雑沓のさまを云つたのである。

いせの國中村といふ所にて

秋の風伊勢の墓原猶す。ごし。
秋も末伊勢の墓原猶淋し。

(花つみ)

(荒小田)

秋風やいせの墓原猶す。ごし。

(芭蕉句選拾遺)

「芭蕉句選拾遺」に

元祿二、元峯所持、宇治の中村といふ所を過るに墓原のありければ、とも有とある。

秋風がやゝ身に沁むところで、墓原は何所にあつても凄愴の感があるが、殊にこの神域近きほとりの墓原は一層凄し、といふのである。

守榮院

門に入れば蘇鋏に蘭のほひ哉
門に入れば蘭に蘇鋏のほひ哉

(笈日記)

(泊船集)

「笈日記」伊勢の部に「貞享の間なるべし、此國に抖擻ありし時」としてあけてある十四句中の一で

ある、「芭蕉句選年考」はそれによつて、「貞享五年の吟にや」と云つてゐる。芭蕉の伊勢路を踏んだのは貞享元年秋、同四年冬、同五年春、元禄二年秋、の四回である。故に秋の句は貞享元年か、元禄二年かでないならば、「年考」の「貞享五年」は全然誤りである。こゝには晋風氏の「新編芭蕉一代集」の元禄二年説とするに従ふ。

守榮院は山田市棒の路にある浄土宗の寺で、「一葉集」に前書が「敦賀守榮院」とあるのは誤りであらう。

守榮院の門を入ると有名な大蘇鉢があり、それに蘭が芳香を添へてゐるのを詠歎したので視覚と嗅覺とが同時に働いたのである。

二見浦にて

硯か と 拾ふ やくぼき石の露

(芭蕉句選)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」所載の鈴木潔氏所藏九月廿二日附松風宛の書翰に

木因舟にて如行其外運衆舟に乗りて三里ばかりしたひ候(次に木因の發句、芭蕉の脇、及び如行の發句有)「蛤のふたみへ別行秋ぞ」二見「硯か と拾ふやくぼき石の露」先如此候以上はせを

とあるので元禄二年の作たることが明かで、「芭蕉翁發句集」の貞享元年説は誤である。

「西行談抄」に

西行上人二見浦に草庵を結びて、濱荻を折り敷きたる様にて、あはれなるすまゐ見るもいと心澄むさまなり。大精進菩提の庵の草を坐とし給へりけるもかくやと覺えき。硯は石のわざとにはあらで、もとより水入る所などくぼみて硯のやうなる、筆置く所などあるを置かれたり、云々

とあり、また「和漢文操」に

西行上人の住み給ふ所は、二見の西吹といふ里なり。岩に扇を敷きて文臺とせし其跡今にありとある。

西行を慕ふ芭蕉は、二見の浦に來り、凹き石に露の置いたのを見て、これはそのかみ西上人の使つた硯かとしのはしく、それを拾ふや、と詠歎したのである。

伊勢の國又玄が宅へとゞめられ侍る比、その妻男の心に
ひとしく、もの毎にまめやかに見えければ、旅の心をや
すくし侍りぬ。彼日向守の妻髪を切て席をまうけられし
心ばせ今更申出て、

月さびよ。明智が妻の咄せん
月さびて。明智の妻の咄せん

(勸進帳)
(小文庫)

元祿四年の「勸進帳」にあるので同二年の作と見る。

又玄は芭蕉歿後其墓に詣て、「木曾殿と背あはする夜寒哉」と詠んだ人で、芭蕉が伊勢に遊んだ時自
宅にとゞめ、夫妻心をつくして歡待した、特に其妻のまめくしさに感じて、明智光秀の妻が髪の毛
を賣て、友を饗應する用にみてたといふ事を運想しての吟である。

今宵は、明智が妻の夫にまごころをつくした事などの話しをせん、月の光りも其話にふさはしく寂び
よかし、といふのである。

畫 讚

枝ぶりの日に。く。かはる芙蓉哉
枝ぶりの日毎にかはる芙蓉哉

(泊船集)
(おくれ馳)

「後馳」に

此句白畫の芙蓉の讚に見えたり、元祿のはじめの吟なるべし

とあり、晋風氏の「新編芭蕉一代集」には元祿二年説としてあるのでそれにしたがふ。

「一葉集」に「遊女の畫讚」とあるのは、「師走袋」に

定めて傾城か治郎など浮世繪の賛なるべし、云々

とあるによつたのであらうか、併し芙蓉の自畫讚とすれば、此推測は全然當を失してゐる。

芙蓉の花は一日きりで凋んでしまふ、従つて其日く中心たる花のありどころもかはれば、枝ぶり
もかはつて見える、それを詠歎したのである。

菊の露落て拾へばぬかごかな

(小文庫)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」の元禄二年説とするにしたがふ。籬がもとの黄菊白菊に朝露がみち／＼てゐる、それがほろりと地に零ちた、と見ればそこに零餘子がこぼれてゐる、それを直ちに菊の露を拾へばぬかごかな、と詠歎したのは、矚目の事實を一層詩化せしめたのである。

秋風に芒打ちる夕かな

(或問珍)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に元禄二年説とするに従ふ。併し全く定めがたい。落莫たる秋風に、穂芒のみだれてはやがて吹きちらさる、夕なるかな、と秋の夕暮の詠歎である。

茸狩やあぶなきことに夕時雨

(芭蕉句選拾遺)

「句選拾遺」に

畫讚、元伊賀今湖東辻村僧冠上家珍

とある。晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に元禄二年説とするに従ふ。茸狩から歸つて來ると、間もなく秋の時雨空がはら／＼と降り出した。いやあぶないことであつた、今少し後れるとこの夕時雨に逢ふのであつた、といふのである。

配力亭にて

人々をしぐれよやどは寒くとも
人々をしぐれよ宿は寒けれども

(蕉翁全傳)

(芭蕉句拾遺)

「蕉翁全傳」元禄二年の伊賀の條に

(前略)直に九月上旬伊勢の遷宮、萬菊、路通、卓袋、にあひ、久居二三日のやどり後、李下を伴

元禄二年

五二一

て伊賀に歸り、霜月迄逗留（李下は一泊、路通は暫くあり）會良も來り。東に別日、奈良の隣のしぐれかな、といふ句あり。霜月末（路通同行）奈良御祭禮拜見、夫より大津に出らる、

とある、その伊賀滞在中に門人杉野勘兵衛（配力）宅での吟である。「芭蕉翁全傳」には此句の後に

此時、水雞笛と名付しものを頭陀袋よりとり出て、配力に附與、近江の人の餞別の具とかきこゆ、

とある。

配力亭に何人か集つてゐたのであらう。よしや宿は寒くとも、この侘び人たちのつどひに情趣を添ふる爲めに、しぐれせよ、と希つたのである。

半殘興行一入といふものゝ會に

冬庭や月もいとなるむしの吟

（蕉翁全傳）

「蕉翁全傳」元祿二年伊賀の條にある。

半殘は芭蕉の姉の夫で、山岸重左衛門棟重といひ藤堂家の臣である、一入は不明。

冬庭や、と先づ荒寥たる前栽の大體を描き、更に空には月も二日三日の風情で糸の如く織くかゝり、地には虫の音が老いて衰れに、これもまた糸の如く細い、といふので、「糸なる」は月と虫の双方を兼てゐるのは、「月も」の「も」で明かである。

平沖といふものゝ宅にて

屏風には山を畫書て冬ごもり

（蕉翁全傳）

「芭蕉句選拾遺」には貞享元年とあるが、「蕉翁全傳」には元祿二年伊賀の條にあつて、更に

此句後に、金屏の松のふるさよと改る、

とあり又「三冊子」にも「金屏の」の句をあけて、

此句、はじめは、山を繪書て冬籠り也、後直し也とある

此家の主は、屏風には山水を描いて、それを座敷に立てまはし、心を其境に遊ばしめつゝ冬籠をする、と云つたのである。

元禄二年霜月朔日於良品亭

いざ子供はしりあかん玉霞

(木葉集)

良品は伊賀上野の女流俳人友田梢風尼の夫である。「折敷に寒き椿水仙、良品」一羽箒の風やむ時に軸まきて、梢風以下、三園、土芳、半残の歌仙がある。

霞がはらはらと降つて来た、いざ子供たちよ走りあかん、と童心的の即興である。

山中子供とあそびて

雪の日に兔の皮の髭作れ

(いつを昔)

雪の中に兔の皮の髭作れ

(泊船集)

初。雪にうさぎの皮の髭作れ

(三冊子)

元禄三年の「いつを昔」にあり、また「新編芭蕉一代集」収録元禄三年正月十七日附萬菊宛の書翰にある。此書翰は三年の「菰を着て」の句の下に全録してある。「去來抄」に

前書に「子供と遊びて」とあれば、子どもの業と思はるべし、強て理會すべからず、機發を踏破して知るべし、先師此句を語り給ふに、予甚だ感動す。先師曰、是を悦ばん者越人と汝のみならむと思ひしに、はたしてしかりとて殊さらの機嫌なりし。去來曰、此説の古事神代卷に出たり。或曰、兔の皮の髭作るは、雪中の寒ければなりなどいろいろをつけて見るこそ片腹いたけれ。斯の如くば「暑き日に猿わか髭をはつしけり」の類なるべし、いと淺間し。

とある。「去來抄」の「神代卷」とあるは「古事記」のことで大國主命と稻羽の白兔の事件をさして云つたのであらう、それにしても正解を得るに苦しむ。

或は、雪が盛んに降つてゐる山中に子供たちと遊んで、子供たちは頭から眞白に雪を被つて跳ね廻る、それで、白兔の皮で髭をつくれ、さうすれば顔まで眞白くなつていよいよほん物の白兔である、とで

も解すべきものか。

初しぐれ猿も小箆をほしげ也 (猿 箆)

元祿三年に着手して四年に公にされた「猿箆集」は、此句から其名をとつたもので、其角の其序文に
(前略)我翁脚行の頃伊賀越しける山中にて、猿に小箆を着せて俳諧の神を入れ給ひければ、忽ち
斷腸の思ひを叫びけん、あだに懼るべき幻術なり。これを元として此集をつくりたて、猿みのと名
付申されける。是が序もその心を取り魂を合せて、去來凡兆がほしげなるに任せて書く。

とある。元祿二年十一月上野から、伊賀川に沿うて奈良に行く途中の吟で、「卯辰集」に「伊賀に歸る
山中にて」とあるのは誤りである。

初時雨のしとくと降り出した中に、小さな猿がかの人に似て小ざかしい姿で、しよぼしよぼぬれて
居るさまは、箆をほしげなり、と思つたので、其時の芭蕉の心中には、猿と人との區別はなく、たゞ
彼と我との間に生物としての親みの觀念のみが働いたのである。

元祿己の冬、大佛營興をよろこびて

初。雪。や。い。つ。大。佛。の。柱。立。
雪。か。な。し。い。つ。大。佛。の。瓦。葺。
(笈日記)
(花つみ)

奈良の東大寺は、治承四年に平重衡の爲に焼かれ、再び永祿十年松永久秀の兵火にかゝり、其後元祿
五年に公慶上人が四方の淨財を募つて大佛殿を建立した。それで元祿二年の冬頃は、或は基礎工事中
でもあつたらう。

工事中の大佛殿の舊礎に初雪がちら／＼と降りかゝる、いよ／＼再建の運びになつたのはよろこばし
いが、なかなかの大工事であることよて、いつ柱立を拜することが出来るだらう、と其日の早からん
ことを翹望したのである。「雪悲し」はあまりに露骨である。

途中吟

元祿二年

山城へ井出の駕籠かるしぐれ哉

(焦尾琴)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」には貞享四年説としてあるが、貞享四年冬の足跡は山城に及んでゐない。それで自分は元禄二年伊賀から奈良を経て、京都に入る途中の吟と見る。

「井出」は山城綴喜郡で、奈良から三四里、京都から七里の街道の一驛で、その玉井寺の井水は清冽なるを以て井出の玉水と稱され井手の玉川は其ほとりを流れて木津川に注ぐ。即ち井出は全く山城の國であるのに「山城へ」とあるのがいぶかしい。それが故に「句選年考」には「山しろ」はもしや「山しな」の誤りではないかと云つてゐる。併し京都の一部分的地名の山科は、井出に對照せしめるには適當でない、これはやはり山城と見ねばならぬものと思ふ。

それで自分は、こゝの山城は國名の意ではなく、「都」「王城の地」などに假り用ひたもので、即ち都へ井出の里から駕籠を雇ふ時雨かな、と詠歎したものと解する。

鉢たゞき聞にとて翁のやどり申されしに、はちたゞきま

るらざりければ一帯こせまねても見せん鉢叩、去來「明
てまわりたれば、

長嘯の墓もめぐるか はち叩

(いつを昔)

元禄三年の「いつを昔」にあり、また萬菊丸宛の書翰によつて元禄二年の吟たることが知られる、其書翰は三年の「菰を着て」の句の下に出す。「もとの水」には前書が

一とせ芭蕉の翁寒夜の都を見まほしく、鉢叩と行連れて、三條のひんがし洛の外に至りぬ。いはゆるじの尼清元あやしみて申ければ、翁のいはく、

とあり、「一葉集」にはたゞ「落柿舎に鉢叩をまちて」とのみある。「もとの水」の前書は句と調和せず、「一葉集」のは「待ちて」とのみで「参りければ」がないので、これまた徹底してゐない、かたがた最古の「いつを昔」が信憑すべきものである。

木下若狭守勝俊は、秀吉の室大政所の兄家定の長子で、關ヶ原の役に兩端を持せしに坐して封を失ひ、後洛東に閑居し、また大原野に移りて諷詠を事とした、家集を擧白集といふ。其墓は落柿舎から遠か

らぬ小鹽山の麓にある。鉢鉢は、瓢を叩いて唱名念佛しながら、毎夜半から洛外五ヶ所の墳墓を巡回し、以て三界萬靈の爲に回向をする空也僧である。

落柿舎で鉢叩を待つてゐたが來なくて、去來に戲言を云はれたが、やがて明け方になつて鉢叩がやつて來た、あの鉢叩のかく遅いのは、さては五箇所の墓地の外に、かの長嘯子の墓をも巡るのか、と詠歎したのである。

貞徳翁の姿を讃して

おさな名やしらぬ翁の丸頭巾

(菊の塵)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元祿二年作とするに従ふ。

松永貞徳は幼名は勝熊丸と云つたが、老後にまた童名らしく長頭丸と號した。

此像は丸頭巾を被つてゐたらしい。それで、この翁の丸頭巾を被つた姿を畫いたのは、かの老後に長頭丸と童に擬したる名をや知らぬナラン、と想像したのである。然るに「知らぬ翁」と讀んで解釋に

苦しむ人の多いのは遺憾である。又「丸」と「長」の對照、一句の構成に若干滑稽の氣分もふくまれてゐるが、それは貞徳の作意に擬したものである。

何に。	此師走の市に。	ゆくからす	(花つみ)
何に。	此師走の市へ。	ゆくからす	(生駒堂)
何を。	この師走の市を。	行からす	(泊船集)
何を。	この師走の市に。	行からす	(芭蕉句選)

元祿三年の「花摘」「生駒堂」にあり、また萬菊丸宛三年正月の書翰(全部は三年の「菰を着て誰人」の句下に出す)にあるので二年の作たることが明かである。「三冊子」には第一の句をあけて、

翁のいはく、五文字のいきごみに有となり、

と云つてゐるのは上五をさしてのことである。

「何に」は「何の爲めに」の意であり、「何を」は「何をまあ」の意である。「市」は市街地の意。

「に」は「そこに向つて」の意で、「へ」は「其方面へ」の意である。一句の中に「何に、市に」又は「何を、市を」とあるのは拙い、これは第二を以て正しきものと見る。木々は葉をふるひ盡して、遠き籬落も望まるとやうな、この冬枯の幽寂味ある郊外の地を後にして、何の爲めにあわたしげに、師走の雑閑する町の方へ飛んで行く鳥ぞ、と眼前町の方へ飛び行く鳥の心を疑つたのである。

いかめしき音やあられの檜笠

(陸奥千鳥)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」に元禄二年説とするに従ふ。

「一葉集」には「自畫自賛」と端書があり、またよく檜笠の行脚姿に此句を題した石摺がある、その畫の眞偽はとにかく句は自畫賛であるらしい。

霰のかゝる檜笠はまことにいかめしい音やナア、と詠歎したのである。

膳所草庵を人々とひけるに

あ。ら。れ。せ。ば。網。代。の。氷。魚。を。煮。て。出。さ。ん

(花つみ)

あ。ら。れ。せ。よ。網。代。の。氷。魚。煮。て。出。さ。ん

(芭蕉句選拾遺)

み。ぞ。れ。せ。ば。網。代。の。氷。魚。を。煮。て。出。さ。ん

(忘れ梅)

あ。ら。れ。せ。よ。網。代。の。氷。魚。を。煮。て。出。さ。ん

(一葉集)

「芭蕉句選拾遺」に元禄二年とあるに従ふ。

「氷魚」は「ひうを」又は「ひを」と讀む、晩秋より冬にかけて、琵琶湖では網で、宇治川では網代で漁る、白魚に似たる小魚。「霰」と「霰」は何れが正しいとも決定し難いが、「霰」の方が感じがよ。 「せば」「せよ」は、「よ」と變體假名「は」はやゝ似て居り、又板木の「は」の左部がかければ「よ」に誤まれるから、これまた何れが正しいかわからぬが、「せば」は未來で、今より後に於て「霰」が降つたらば」の意であり、「せよ」は「霰が降り」と希望する意である。それで自分は第二を以て正しきものと見る。

草庵に人々があつまつたので、これはく／＼ようこそわせられた、何も無いが、到来物の網代で獲つたといふ氷魚なりとも煮て出さう、そしてゆる／＼俳談に耽けることにせう、空もこの我々に興を添へる爲めに霞でも降らせよ、といふのである。

大津にて智月といふ尼のすみかを尋て、をのが晋の少將とかや、老の後此あたりちかくかくれ侍りしといふをおもひ出て、

少將の尼のはなしや志賀の雪 (芭蕉句選拾遺)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」連句編に大津の村田氏所藏の智月尼筆の詠草に、智月の「あなたは眞砂爰はこがらし」と脇だけあつて、「元祿二年冬」とある。然るに俳句の部に元祿三年説とあるのは誤植であらう。「一葉集」には端書が、

おのが晋の誰人となん世にさたせれて、老の後志賀の里に隠れ侍りしとなり。今大津松本あたり、

智月と云老尼の許に尋て、斯る事など語り出けるつゝておもしろければ。

とある。「おのが晋の少將」は畫家藤原信實の女で、後堀河天皇の中宮に仕へて中宮少將と云ひ、「新勅選集」にある「おのが晋のつらきわかればありとだにおもひもしらで雞や鳴くらむ」と歌をよんで「おのが晋の少將」と呼ばれ、後に中宮が藻壁門院と院號を名のらせ給ふに及んで、また藻壁門院少將と呼ばれた。

乙州の母智月尼を訪ねて、折からの志賀の里の雪に思ひ出て、語る、老後其あたりに隠退したといふ「おのが晋の少將」の尼の話やナア、と俳諧の智月尼と、歌の少將尼の昔語りをしての詠歎である。

石山の石にたばしるあられ哉 (麻生)

晋風氏の「新編芭蕉一代集」考證の部に元祿二年説とあるに従ふ。

石からはね返つてまた石を打つ光景を詠歎したのである。

芭蕉句集新講

越の新潟にて

海にふる雨や戀しきうき身宿

(俳諧古事談)

五三六

越後路の句なる故祿元二年とす

北越海岸地方にて、旅商人の滞在中かしく遊女を「うき身」と云ひ、そが住居を「浮身宿」といふ。浮身宿に、かれは海にしとくと降る雨がや戀しき、と想像したのである。

昭和七年九月十六日印刷
昭和七年九月二十日發行

芭蕉句集新講(上卷)

定價壹圓八拾錢

著者 服部 畊石

發行者 四條 輝雄
東京市神田區駿河臺町一六番地

印刷者 高田 邦夫
東京市神田區駿河臺町一六番地

不許複製

東京市神田區駿河臺町一六番地

發行所 四條書房

電話 神田(2)三八〇番
振替 東京一〇三八番

(刷印房書録四)

~~620~~

~~204~~

終

